冠向千代孜壽金

75101
282

始

特101
282

紀念發行

冠句千代の壽目次

◎いの部

祝

今はゆめ　いくつに成ても
いきな事　命が延び　幾ク度ヒも
いやしやなあ　いたわって　勢ィよふ

いつもの事

◎ろの部

露次住居　繻を漕て　蠟燭ともし
ろくでない　ろくにきかず　勢して効
ろくになり　六齊打　六根清淨
論仕合　露顯して　露命つなぎ
論はせず　論より證據

◎はの部

花は花　ははんそふか　咄しして
花が咲き　葉が散て　はやい〳〵
花じや〳〵　はる〳〵と　はつきりと
はたらいて　初春に

大正
5. 5. 17
交内

◎にの部

賑やかな　にいと笑ひ　人形の様な
憎くい奴ッ　にべつけて　二度の臍
二回目じや　日本一　にわかの事
にこ〳〵と　二度とない　二世を約し

◎ほの部

譽れじやなあ　ほめられて　ほとけてる
細ふなり　ほんのりと　ほんまになり
外かへ行　佛じや〳〵　豐年じや
程がよい　ほしいなあ　帚持ち

◎への部

へばり附き　下手の横好　べかこして
屁とも思はぬ　返事がよい　便利じやなあ
勉強して　紅附けて　へん屈らしい
へつらわぬ　へり傳ひ　下手ながら

◎との部

とても〳〵　得心して　とろける〳〵

どうぞして　友白髪　德な人
隣り　年〳〵に　友稼ぎ
頓智よふ　何處迄も　とし〳〵と
飛上り

◎ちの部

ちめたいなあ　千鳥足　ちから一ばい
散て來て　血の涙　千代八千代
散つた〳〵　ちから入れ　茶々無茶く
ちら〳〵と　珍ン無類

◎りの部

りんき應變　隣家から　利子に廻し
力き入れて　恪氣もよし　料理屋始め
りりしいなあ　臨時　龍書書き
利益有り　立派じやなあ

◎ぬの部

脫ぎ捨て　抜いたりさいたり　沼
盜まれて　ぬからぬよふ　抜足さし足
抜けた〳〵　暖ふなり　ぬるい〳〵

主シぬけつ隠れつ　盗み損ン

◎るの部

留主の間に　るすかいな　るいがより
累代榮へ　留主でもよい　るす遣かい
るいだらけ　流勢して　るりの光り
るんな奴ッ　るいを集め　るいがない

◎をの部

をふ嬉し　惜しからぬ　遅い〳〵
恐れ多い　追ひ拂ひ　おとなしい
をい〳〵と　恩が有る　をだてられ
思ひ通り　奥が有り

◎わの部

忘られぬ　割つては言はぬ　わざ〳〵と
譯けはいろ〳〵　われも〳〵　忘れ人探がし
忘れて有り　和合して　わからんながら
我が大君の　忘れてならぬ

◎かの部

考へつく　替わり賜ふな　限り無く

かたい〳〵　かついで戻り　可愛がり
感心〳〵　貸してもらい　嫌に鼠
かんじん要メ

◎よの部

四ッ五ッ　萬ッ安々　嫁連れて
夜るも晝も　慾　夜は長い
慾が深い　慾がない　よろこばしい
横になり　夜が明けて

◎たの部

立板に水　澤山そうに　たてた〳〵
適さかに　大變ン〳〵　高い〳〵
尋ねて見よか　立ちとまり　大事にして
大事に知られ　たのしみじや　爲になり

◎れの部

禮言ふて　れき〳〵じや　例になり
禮　義　列を揃へ　例はくづさぬ
禮はいらぬ　れこ次第　例にして

◎その部

そこ〳〵に　麁末にすな　雜巾持ち
蕎麥がよい　傍がよい　空向いて
そしらぬ顔　園　それ〳〵〳〵
そこ〳〵ぢや　そわ〳〵と

◎つの部

月にむら雲　謹しみて
月が出て　釣に行
つまみ出し　つよい〳〵
積つた〳〵　罪も消へ
つら〳〵と
月は秋

◎ねの部

願ふてもない　覘らひ通り　熱心
願ひが叶ひ　寢ても起ても　寢られん〳〵
年忌が廻り　根が出來て　猫二疋
直が出來て　猫に小判

◎なの部

生嗅い　中にも一人り
ながらへて

長き緣にしを　啼く鶯の　流れてる
何一事も　長の月日　中に一ッ
泣き笑ひ　なさけない

◎らの部

樂觀して　落第して　埒が明き
來年迄　樂は苦　樂人じや
樂〳〵と　羅生門から　落涙
亂法な　蘭詠め

◎むの部

むけた〳〵　無理言ふな　昔しを思ひ
娘に惚れ　昔も今も　虫の音聞き
無茶　むこ向いて　無心言ひ

◎うの部

嬉しい〳〵　うけがよい　浮世
產れ子じや　うつくしい　牛
運が強い　賣たるものは　麗らかな

◎のの部

延びちゞみ　野も山も　登りつ下りつ

呑み込し　長閑〳〵　覗いてる
野中に立　軒下に　長閑〳〵
鬚斗つけて　のこり多い

◎おの部

大鯛小鯛　を、嬉し　送り屆け
親父を歎し　凡そ　百　をびたゞしい

◎くの部

くるつと廻り　喰いついて　圖の爲
苦勞して　くる〳〵と　ぐわんせなし
くすぼつて　闕白殿　雲の如し
苦　界　苦にならぬ

◎やの部

燒餅燒き　やれ〳〵まあ　山程高い
山路を分けて　山の中　やかましい
やつぱりそふか　謎しいなあ　藪入して
安い事　山越へて　山と海
山と湖み

◎まの部

まて〳〵まて　間違へた　丸ふて四角
待つてくれ　松　まくられて
先ッ〳〵先ッ　眞直ぐに　まさかの時
眞ア白け

◎けの部

檢査して　今朝見たら
けつこふ〳〵　景色譽め　權利が有り
毛が障り　けしからん　實に豐

◎ふの部

ふき送る　古いけれど　殖へた〳〵
ふみつけて　ふみかぶり　伏拜がみ
殖へて來た　普請して　ふ仕合せ
舟にのり　文たより

◎この部

小半日　小流れ　乞食も
肥へました　小袖着て　ごく内證

こらへ〳〵　こりました　腰打て
越し方思ひ

◎えの部

海老　ゑらい奴ッ　縁を待ち
遠方から　ゑらい〳〵　縁じやなあ
ゑらいけど　遠慮して　永代のこり
驛が殖へ　益が殖へ

◎ての部

手柄〳〵　出て仕舞　電氣
手を叩き　天の與たへ　寺から里
手を入れて

◎あの部

あぶない〳〵　あつさりと
朝　朝起て
青〳〵と　有るが上にも
秋入じれや　あほらしい
哀なもの　あり〳〵と

◎さの部

さあおいで　坂登り　扨も涼しい
さま〳〵に　さとられて　さかり〳〵
咲かけて　咲揃ひ　誘ひ合い
酒が好き　差しつかへ　座敷建て

◎きの部

きれい好　氣に入て　菊を見て
きさんじに　氣儘くらし　きつしりと
昨日今日　菊　きたない顔
木が太り

◎ゆの部

湯がぬるい　油斷大敵　夢見し心地
雪が降　ゆる〳〵と　夕間暮れ
ゆつくりと　夕邊から　愉快〳〵
ゆられてる

◎めの部

眼にもの見せ　眼が直り　めつきりと
眼をまわし　飯の種　眼にとまり
めでたい〳〵　面冠り　名所じやなあ

◎みの部

未練のこし　御代泰平　水嚢らい
みとむない　見附け出し　水あけて
未開〳〵　神酒上げて

◎しの部

知つての通り　集合して　しやくり上げ
静な事　辛氣くさ　嗣かりつけ
思案して　辛苦して　敷島の道

◎ひの部

日暮になり　火の用心　ひんがよい
日が暮て　日の出　久々じや
日を重ね　低い鼻　低い花
ひや〳〵と　日を撰らみ

◎もの部

もし〳〵と　もまれてる　もつともじや
儲けてる　囉ろて來て　もろい〳〵
最ふよかろ　物知らぬ

◎せの部

世界一　せくな〳〵　世間ンが廣い
脊が低い　千に一ッ　成長して
先生内か　責任をび

◎すの部

涼しい〳〵　すきが有る　好きは格別
すいとした　すうている　すかたん
澄みわたり　末〳〵迄　進んでる
住み馴れて　末思ひ

◎京の部

京にも田舍　京へ行　京
京は古郷　京の賑ひ

目次終

○いゐ之部

祝　聖壽無量の君仰ぐ
同　喜の字を鶴にした帛紗
同　金子では買へぬ壽に奢る
同　をもき世輕るふ着た紙子
同　拜領の軸かけて笑む
同　勲章にまぶい戰勝國
同　記念にのこす合うつし
同　鶴龜諷ふ孫曾孫
同　大きなちらし出す銀行
同　米壽嬉しう友まねく
同　惜しい全盛が廓に減る
同　ひよつとないのがほんまなら
同　若牛に熨斗附ける伯父
同　元の名を書く壺包み
同　菖蒲の薫る神酒の口

今はゆめ　身ン代呑んだ菰冠り
同　珠數に艶出す粹の果
同　卒塔婆となつた花の色
いくつに成ても長生き相うと聞きや嬉れし
同　雀何にやらのふ婆さん
同　慾の皮だけ皺がない
同　孝ゆへに身はかたづかぬ
いきな事　裏長家には惜しい媽
同　聲は菊石でない端唄
同　何處で此帶を買いたへ
同　われるとすぐに鑄掛け旅
同　女俠客する役者
命が延び　劍の下たも法りの德
同　酒あつてこそ櫻かな
同　物喜こびをしてる老
同　辷り仕舞の墨衣
幾く度びも　蜂の巣になる聯隊旗

同　大峰山に減らす杖
同　嬉れしい文をくり返へす
同　米賣た錢下手に讀む
同　失敗歎げく所澤
同　皺のばし賣る湯やの札
同　堪忍の眼は主ウにあり
いやじやなあ　山吹植へぬ若夫婦
同　裸体美人が寫眞急く
同　妹とも灸トあつがらぬ
同　見てもらはんと子が出來ぬ
同　雨には近い虫手まり
同　乘り合よごす船ナ嫌らひ
同　義理汲もふより後家立てる
同　持參金かてあんな媽
同　早ふ取りたい顔の網
いたわつて　我れだけ酔ふた馬士でない
同　碁の御客には下女寢さす

同　飼い人は鼻木よふはめぬ
同　繼子の袖に綿ふかす
同　西洋花道く溫度室
同　雀に延ばす藏普請
同　孫寒むがにり婆々がする
勢いよふ　進軍喇叭山越へる
同　京まで鮎の水盈す
同　雪國の子はつかひよい
同　堂島を出てする身請
同　首途の夫にちから足す
同　犬の駈け出す雲の烟
同　待つた世嗣の泣く盥
いつもの事　箸とる度びに手を合す
同　糠に釘打つ樣な異見

○ろ之部

露次住居　流石都は結び帶

同　多い孝子の名が高い
同　日曜の旦那送り出す
同　大がい所得稅出す都
櫓を漕いで　鯖舟の急く南風
同　一駄の金子もほしうない
同　密航取り卷く稅關吏
同　見臺に汗溢してる
同　說教添乳にしてる婆々
同　涙に縫ふてる下女の針
蠟燭ともし　佛檀の嫣さびしがる
同　我が名を明こふ去ぬ舞妓
同　送り彈く間は白湯呑む
同　道案内する祠らの神
同　緣起が濟むと拜まれる
同　名刀の鑑定凄ふする
ろくでない　不孝の手紙封うきらぬ
同　隣りの鷄の夜啼する

同　親族の寄る嫁の留主
同　旱魃の裏水に逢ふ
ろくにきかず　藪醫の藥料出し惜しむ
同　嘘も土産も喰はぬ嫣
同　說教見に來てござる後家
同　生木裂たら花が散る
同　嫣の異見も大公望
勞した功　外國へ出す宇治の花
同　腹にたよりの出來た嫁
同　汗の油で田が肥へる
同　取り入れ米にみえる豐
同　後家のそだてが世に光る
同　紙幣に尊像畫書かれる
同　宮に納めた戰利品
ろくになり　袴かけさす妾の宅
同　褶を取卷く不獵唱し
同　御免ン蒙る相撲取

同　宿直下がつて膝さする
同　手酌を好む在の伯父
同　軍服脫ぐと君と僕
六齋打チ　嫣の踊りも呵かられぬ
同　小便ン得意の床カへ出る
同　田仕事しばし伯父賴む
同　夜は清水を賑やかす
六根清淨　木食の屎ソ蠅も來ぬ
同　蓮の露汲む佛畫書キ
論仕合　跡で笑ふた鰈平ラ目
同　椅子はなれたら元の友
同　まけた方には水が無い
同　金子より水のほしい村
露顯して　筆の先から暇が出る
同　妾は二度取る左り褄
同　這はれた方も暇が出る
同　苦心の探偵賞狀得る

同　賄賂から身の寂となる
露命つなぎ　涙で貰ふ恩賜金
同　歸朝まで苦は見せぬ親
同　仁ンと名の附く鳥蛭子
論ンはせぬ　燒香たれでも皆血筋
同　酒癖わるい連れ透かす
同　たらぬ相人に弗子振る
同　墨繪の鷺で濟す伯父
論ンより証據　氣ふ性母にさとられる
同　鱗の附いた猫の口
同　辯護が無罪主張する
同　嫁は酢いもの好ノんでる

○は之部

花の花　そも神代から薫る菊
同　爵位をゆめに見た書生
同　全盛何ン代繼ぐ花魁

同　王と名有りて散り易い
はゝん成ル程　そふ言や僕もわかるわい
同　爰を斯うして斯うござる
同　誘はれて來た甲斐が有る
同　娘の病氣よめた親
同　ふみ出して知る親の恩
同　一ッ賢こふなつたわい
喘ナしして　世界の平和つろふ待つ
同　庚申の夜ハ正々し中
同　櫂も楫梓も皆扇
同　廻國の僧楷の禮
同　堪忍袋縫はす伯父
同　あの山越へる間に寢さす
花が咲キ　叭米買ふ車夫の媽
同　女寡めは同居せぬ
同　鮎釣る竿も軒に賣る
同　人に產れた甲斐が有る

同　親族不和な未亡人
同　けふはとりたい禁酒札
葉が散て　菴の筧は不自由がち
同　餅花咲かす川柳
同　廓の霜枯れ知る柳
同　高雄の茶店床几積む
同　五重の塔は顯らはれる
はやい〳〵　戸明ける門を蛭子笹
同　まだ這はぬ子に孕らむ嫁
同　紀州でもまだ初茄子
同　最ふ高島は今とし米
同　光陰は矢と腰の弓
母か有つたら　ミルクの苦勞さサぬ姉
同　辻が花見る初イ奉公
同　妾に孝する憂キは無い
同　割つて言イたい緣咄し
同　初イ産こころ弱い嫁

同　墓は繼子の泣キところ
花じや〳〵　まけた相撲が氣術ない
同　見られに行クも見ニ行くも
同　呵かられる間が我れの春
同　戀は世間ンへ知れぬ間が
はる〳〵と　都踊りハ秋ながら
同　眞水貰ふて去ぬ別莊
同　寄進の槻難所越す
同　乳母の里問ふ留學生
同　横文字も有る年賀狀
同　嚴しい文も添ふ學資
はつきりと　木もよめそふな冬の山
同　めがねの德を譽メる老
同　鬼灯出して電話きく
同　官報ヨミよい新活字
同　山の司が裾ソ長ふ
同　幽靈笑ふ在芝居

夜るも進歩した寫眞　同
足で飯焚かねのばす　はたらいて
百性は百性してりやよい　同
納稅の義務增して居る　同
身爲の汗を子に讓る　同
息キ有るうちは身の冥伽　同
鍛冶屋で手術うける鍬　同
禮に來たらし梅の鳥　同
盈るる箔が膳の塵　同
機家につもる薄ほこり　同

○に之部

家体引出す氏子中　賑ぎやかな
紙の建石轉けそふな　同
日曜が丁度花盛り　同
下手の寄つてる揚弓屋　同
壽に滿足な孫の數　同

出る帆入る帆は國の花　同
ヒイキの門トへ來た遙り妓　にいと笑らひ
病む間で包む扇箱　同
捨てられしとは知らぬ軒　同
書留の封ウ切る娼妓　同
親分の顏見て絕命　同
廣告に貸す寫眞撮る　同
眼しばきもせぬ藝の虫　人形のよふな
母に未練の出る寢棺　同
金子の威光で出た議員　同
花より人の見る床几　同
淵から一人去ぬ毒婦　憎くい奴ツ
朝は愉快な虱取り粉　同
後妻と俱に解雇する　同
里の妹も妾譏しる　同
助けた猿め木隱クれる　同
絹夜具巢立した鼠　同

にべつけて　呵かるばかりでない異見
同　跡トも大事な得意先
同　まとまる絹を齒に着せる
同　無心斷わる口上手
同　支配が腹ラの涙金
二度の廣　煤竹撰らむ茶筌職
同　若ふつくるも涙種
同　祭り道具になる鎧
同　金婚式も同じ酌
同　後妻ながらも扨て見合
二回目じゃ　御國へ戻る旅順港
同　同じ七荷が曠たゝぬ
同　樓主に馴染ミ有る稼ぎ
同　猛者引買はぬ東山
同　執行猶豫ですまぬ罪ミ
同　乳の苦勞のない產婦
目本一　浴湯設備も寶塚

同　ゆめに見た山氣に祝ふ
同　どこから見てもをれの嫣
同　譽め樣で瀧の音が止む
同　大廟の名は外かにない
同　銀なら生野金ンは佐渡
にわかの事　晒布屋總出する磧ラ
同　まつたの利かぬ死と產れ
同　泣キながら出る電話室
同　寢耳に水の緣ンにつく
にこ〳〵と　文の返事を走しり書キ
同　鯛釣た樣な顏してる
同　大黑に似た施行主
同　實母の嬉し被キ初メ
同　春魁る花の兄
同　とうやら緣の有る見合
二度とない　若い時じゃと粹な伯父
同　義理の妹に卑下さゝぬ

同　可愛さつめてやる簞笥
同　柳が笑ふ鰌取り
同　若世ハ面白ふくらせ
同　世界にわたる大戰爭
二世を約し　天窓の輕ふなる花魁
同　寫眞一枚臍の蓋
同　嬉しう起証とりかはす
同　盡きぬ契りを笑む操

○ほ之部

譽れじやなあ　棟梁が式の素袍着る
同　師も本望がる卒業生
同　今年も地築譽る伯父
同　日本の地に鰭がつく
同　相生の壽の渡り初め
同　輕るい下駄履く廊のがれ
ほめられて　畫像かなしく祭る後家

同　來る度嬉し里の母
同　髮置の子を高ふ抱く
同　御邪魔さんじやと運ぶ稻
同　御慶二度も來てる孫
ほとけてる　孫には甘い臍の紐
同　船橋浮雲がる雪解
同　媒人氣にする熨斗昆布
同　危險に思ふ牛の綱
同　鼠畫書イた爪メの先キ
綱ふなり　雲切りそふな月の鎌
同　島のともしに啼く千鳥
同　菴の筧も落葉時
同　花火線香は最ふ仕舞イ
同　鶺鴒の飛ぶ川流れ
ほんのりと　惠方の宮が賑わしい
同　極樂連が蓮に寄る
同　命の惜しうなる二人り

同　七難ン隱くす薄化粧
同　附キ出してよいあぶり海苔
ほんまニなり　醫者もよぎのふ屆ケ出す
同　嘘から變わる廓の戀
同　意地の身請のつらい姉
同　役者咄ナしが芝居行
同　さがない口を煽て止む
同　米屋の世話を歎く後家
外かへ行く　網舟賛成せぬ忌日
同　奥樣風俗はお樂ノしミ
同　宇治は二番茶三番茶
同　團体一人り宿奢ごる
同　吉原卒業した學資
同　華表氣附いた忌中髷
佛じゃ〳〵　媒人が姑ト嘘つかぬ
同　死んだ乞食に舍利がふく
同　說教戻りに嫁譽る

同　曼陀羅織た蓮の糸
同　故事有りがたき御難ン餅
豐年じゃ　田舍もよけりや廓もよい
同　呪いの禮も米て來る
同　きれいに寄つた在のかけ
同　一粒萬倍イ積む俵
同　在所中の嫁孕らんでる
程がよい　其くせ前へは堅い嫁
同　女將は操たてながら
同　番臺が笑ミふりかける
同　手活けの花にして見たい
同　大金子かけた嫣らしい
同　電話借り人も氣術ない
ほしいなあ　垣越しに見る余所の花
同　石女のゆめは只離綠
同　よれ葉の稻に空見てる
同　隣りは子達チ内ハ金子

同　折るべからずと有るけれど
同　川といふ字で寢たい嫁
同　干瓶ンハ足らぬ塩煎餅
箒キ持　乳母が碁石を掃キよせる
同　戸は明けた儘銀世界
同　禿も俱に雪の責メ

○へ之部

へばり附キ　百里走つた蝸牛
同　鴛が人なら見てられぬ
同　癪氣はどないなりました
同　是が無心の羽がい責め
同　石の地藏に蔦紅葉
同　船板の底に貝も見る
下手の横好　碁盤賣りたい醫者の妻
同　三味線彈キも泣く葱カ
同　借馬中〳〵落チられん

同　いつも土俵で雲見山
同　袴を脱がす歌かるた
べかこして　緒〳〵それから拜んだり
同　媽に店番さしとけぬ
同　釣り飼に猿の牙むかす
同　まだ切り賣りの指で無い
同　號令かけてる猿廻わし
屁とも思はぬ　砲聲聞きつゝ碁を圍む
同　紫陽花笑て見てる妾
同　青島占領こんなもの
同　わんばくは灸なれてよる
同　納盃笠に着てもどる
返事がよい　無事に納まる日支談ン
同　機數殖やす輸出絹
同　こゝろいそ〳〵花車と待つ
同　悋氣包んで羽織出す
同　兩方へ足の向く媒人

便利じやなあ　栓さへ捻じりや火も水も
同　ベルで出て來る小間使ひ
同　御眞那籠が紙で來る
同　風呂も炊事も取る筧
同　不二の雪間ふ電話室
同　稻運ぶ間の橋かける
勉强して　鍬洗ふ手に月がさす
同　朝起の家金子が寢る
同　日に二回づゝ連鎖劇
同　田舍もかとふない豆腐
同　施藥から名の上がる
同　娼妓に出來た枕すれ
紅附けて　年比の啞母泣かす
同　逢ふ約束の極まる耳
同　たつた日隱す鹽小鯛
同　眼に愛ふくむ女形
同　大の字祝ふ曠小袖

同　嬉しう戻すハンカチフ
へんくつらしい髯のばしてる書林店
同　管長の御氣に入る佛師
同　金子では遣らぬ媒人の禮
同　笠もあみだに着ぬ法華
へつらわぬ　心の儘を竹の奥
同　盟同國へちから足す
同　竹刀持つたら指南番
同　妾の介抱はとめる醫者
同　いつも白石持つ茶器屋
同　出世は我の腕に有る
へりつたひ　猛者引も居る遊さん舟
同　谷川當てに出る麓
同　綱で切れ込む岩の角
同　目のない石にわたり打つ
下手ながら　ちよつと字になる幼稚園
同　媒人は役目だけ諷とふ

同　墨附けられて來た仲居
同　三人で打つ碁ではない
同　自筆で里の安否問ふ
同　保養がてらに釣りに出る

○とノ部

とても〳〵　筆下に置くよしの山
同　白石の碁器持ちかゑる
同　そちは百性が性に合ふ
同　關には五人かゝつても
同　資本を聞て競爭せぬ
同　そんな直で賣る雛でない
得心して　寒うないとは親が泣く
同　債主の裾に寢る娘
同　綴れと錦とりかゑる
同　根差し拔かれる朝別れ
同　媒人の顏で髮殘す

とろける〳〵　火串身震ひする旅僧
同　坩堝からたつ火が凄い
同　情夫に逢ふ夜は我からだ
同　化學應用の妾の腕デ
同　臺灣の夏かけ直言ふ
同　硫酸かける樣な妾
どうぞして　譽められる子がそだてたい
同　樂のさしたい親思ひ
同　達者なうちに見たい孫
同　不孝一人りを苦の繼母
同　親堪ン納さす世にしたい
同　日附けの狂ふ文使ひ
同　今度は男子產ミたがる
とも白髮　佐渡稼ぎには珍つらしい
同　父母はめでたい渡橋式
同　忍んだ事は幾ク昔し
同　貧ンの中でも無事祝ふ

同　妻は當座の花でない
德な人　苦は女房にさして置き
同　一代してぬ尻からけ
同　年より若ふ見られてる
隣り　親族よりも助け合ふ
同　釣瓶に碇かり借に來る
同　朝顏の花覗いてる
同　延びた糸爪の詫に來る
同　弟に買ふて分家さす
同　壹町余りも有る田舍
年々に　しめ繩すれて來る皺ゝ
同　山家は高い木が惠方
同　寒さはきつい樣に思ふ
同　仕組もかゐる菊人形
同　牛にも喰はす雜煮餅
とも稼ぎ　劍舞と八雲墮落の後
同　風呂敷で來た我精嫁

同　家風俗耕す鍬遣こふ
同　冥伽から咲く蓮の花
同　花嫁らしうしてられぬ
どんちちよふ　娘が文を鶴に折る
同　場合で嘘も世の道具
同　去られる母の下駄隱す
同　任務を遂げた斥候兵
同　丁稚を譽める賊の跡ト
どこまでも　神代の榮こふ萱の屋根
同　男に勝さるまけ嫌らい
同　金子の威光は恐ろしい
どし〳〵と　獨逸的ふの聯合軍
同　とり附けわたしてる銀行
同　同情も山となる義捐
同　進擊してる日本軍
同　行者の歩行く鐵の下駄
同　大豐年を見る港

同　重荷嬉しう運ぶ秋
同　雪見はいざや轉ぶとも
飛上がり　素人に徳の多い相場
同　春場所から座が變わる
同　染料問屋が戰爭笑む
同　眼から火の出た一ツ灸
同　鍛冶屋の門で止むしやくり
同　睾丸腹ラへ隱クれん坊

○ち ノ 部

ちめたいなあ　茶漬け喰ふ度ヒ嫣思ふ
同　雜巾持つ手に泣く奉公
同　西瓜ほめ合ふ晝寢起き
同　糺ほめ合ふ涙花客
同　つけねばならぬ莖ながら
同　紙の雪でも情がうつる
同　霜棹しごく渡し守

千鳥足　羽子の邪魔する屠蘇機嫌
同　案じる花車を輿にして
同　涙形に道辿つてる
同　牛に引かれて去ぬ我が家
同　肩貸した方も頬イの友
同　附け覘ふ鎗身をかわす
ちから一ばい　今端の孝に夜るがない
同　別家が落す座敷市
同　先引の屁はゆるす嫣
凹　灰搔してる歸余の後
同　伯母も肩脫く緣定め
同　震災の地へ救助する
同　賣られる舞と子は知らぬ
散て來て　有りがたさ增す蓮の花
同　木の葉も舞ふか神樂堂
同　こめかみかゆいおせん散ン
同　戀のとり持ちしてる凧

同　花の短冊戀の橋
同　花は莚へ小紋置く
血の涙　我子の決死譽める父
同　離別の元はわるい咳
同　城跡の桐見る士族
同　面會謝絶する監守
同　夫トを救ふ肌襪かす
同　遺言狀に付た染み
千代八千代　舊都は秋のよふにない
同　菊の流れにない濁り
同　天の位いに付き賜ふ
同　金婚式に孫招く
同　花は御幸の名にのこる
散つた〳〵　盡きぬ流れは五十鈴川
同　前うけ悪るいばれ語たり
同　看經の洩る地藏院
同　是から嵯峨は時鳥

同　借家の尻を笹が急く
同　名の玉川は黄に淀む
同　客見て舟の柳掃く
ちから入れ　ぶらこゝの繩ためす乳母
同　引た小松に投げられた
同　妻もかみづる撰擧熟
同　妾が提げる一ト釣瓶
同　銀主が蘇生さした店
同　蛇喰ふ鳥が羽子はじく
茶々むちやく　銀となまりと替へてから
同　佛檀潰す外宗凝り
同　初代の汗を風の灰
同　停電さわぐ性念ン場
同　噴火の灰に田が埋る
同　生活難に義理も欠ぐ
ちら〳〵と　三味イ凄い秋螢
同　火は家ならで霜の空

珍ン無類　燒けた鰻に碁盤押す
同　世界に操譽められる
同　慾を放れた畵を譽る
同　鱗子に打つ舌皷ミ
同　破戒する氣になる曲輪
同　田地持參の嫁の鼻

○リノ部

りんき應變ン　家内の塵芥も冠る嫁
同　簪シの鈴とる娘
同　軍儀の變わる夜るの雪
同　堅いばかりが能ウじやない
同　俳優の媽が粹きかす
同　取越し苦勞せぬ度胸
隣家から　後妻すゝめる出商人
同　散つた白旗持つて來る
同　塩借りに來る雪の里

同　柴の駄賃は取りかゑる
同　繼子いじめをうくさがる
同　木の葉の詫に柿送る
利子に廻わし　五年たつたら土藏建る
同　婆々は死ニ金子迷ひ種
同　箔屋の媽が臍殖す
同　無益に金子は寢さしとかぬ
同　媽とよろこふ有余金
同　まだ三代も柿のへた
りき入れて　民の苦痛を議場で吐く
同　甚兵衞勘兵衞にして仕舞ふ
同　粥の身につく稽古臺
同　問屋が新酒圍コわせる
同　侗が椎の木ゆすつてる
同　窓の紐切る凍の朝
同　かん〳〵の上エ笑らわれる
愔氣もよし　奥さんの方へつく下女

同　深ふ思へば憎くふない
同　本心の情がうけとれる
同　笑てして居りや怪我はない
同　いら焼きせねば芳ウばしい
同　店の勵みになる競爭
料理や始じめ　鰻は女房の地獄筒
同　粋な娘にして仕舞ふ
同　山家にとつた水電氣
同　資本の出來た鮎荷ひ
同　馴染み客引く仲ゐ果て
同　丁字風呂から人氣取る
りゝしいなあ　學生が絣りしやんと着る
同　桃から割れて出た大將
同　乳母が履かした靴がなる
同　劍で指揮する足掐子
同　太刀持連て土俵入
同　袴着の供嬉し乳母

臨時　巡査も出張る花盛り
同　筆先さゝぬ店をろし
同　かけ橋早い演習川
同　家令も御召秘密かる
同　小驛キの客は乘れぬ汽車
同　小姑へ貸す裾模樣
龍畫書き　至らぬ筆も賀に祝す
同　脊中の皺が恥かしい
同　青雲せよとの場所襦袢
同　金の付てる筆の先
同　揃衣の凄い肉ク襦袢
同　太皷めでたい初節句
同　襖の凄い大廣間
利益有り　思惑の株うんと買ふ
同　余所の眞似見て畦上がる
同　擴張して居る養鷄場
同　此妓一人りが米唐戸

同　荒地整理は村の德
同　水車業殖へる谷住居
立派じやなあ　銅像見上げて德偲ふ
同　あの關とりはをらが國
同　繼母が飾る初節句
同　圍イ拂ひが眼にとまる

○ぬノ部

脫ぎ捨て　艸鞋忘れぬ恩の家
同　けさは毛虫も歌の題
同　庭の蘇鐵も春にする
同　重み恐るゝ雪の簑
同　跣足で戻る癆り病み
同　棚經戻ると不行儀な
扱いたりさいたり　見事切るなら切つて見よ
同　終に喧嘩になる樋口
同　簟笥は嫁の涙種

同　淺瀨を渡る舟の竿
同　石油ポンプで小出しする
同　まだ蒸んとの芋屋店
沼　甚兵衞と申すわたし守
同　どふど田にした水工夫
同　畵師の眼につく捨小舟
同　問題になる開作地
同　余所の雨乞寢て見てる
盜まれて　最ふ禁酒じやと西瓜番
同　大事の菊の葉がたらぬ
同　短册譽る花の主
同　其蔓たぐる西瓜番
同　菰樽に附く錐の穴
同　我れの聲ワ色聞く役者
ぬからぬよふ　勵みをつけて資本貸す
同　人網も張る獸狩り
同　敷た寢所に水添へる

同　ピストルも持つ銀行員
同　糠玉仕組む質の網
抜き足さし足　陸言トけなりかるおちよば
同　恪氣が汚す上ワ草履
同　供も氣の有る虫撰らみ
同　縁ンの秘密を聞く娘
同　廊下越す灯が袖圍ひ
同　壁際凄ふ退く繼子
抜けた〳〵　智惠の輪乳母に賢がる
同　草津から出す詫び手紙
同　丹波の牛は樂な穴
同　臼をぬらさす蒸籠方
同　茅の輪の向コは秋の風
同　我が姿書く手洗鉢
暖ふなり　作事場を出る砥石賣
同　小猫の鈴が椽に鳴る
同　田螺が家を持ち歩行

同　鷄も雜煮の火に飄ふ
同　青柳芽たつ向ふ川岸
同　地金を出した身錆嫁
ぬるい〳〵　嫁が張板持ち廻はる
同　茶椀の葛がかたまらぬ
同　女官へ賣れる卷萱
同　炭團皮わ剝ぐ夜るの冷
同　齒車で越す坂もある
同　京都の風呂はヘイラレネ
主シ　龜石に乘る人は無い
同　雲か畑での人望家
同　惠む學資に年ンが增す
同　夕立に屋根のもり見せる
同　落葉掃てる神の留主
同　逢ふ夜折〳〵我身買ふ
同　根さしぬかるゝ朝別れ
同　鍬杖で見る畑の梅

ぬけつかくれっ和子は繁げ〳〵御乳の郷　同
儘ならぬ間が首尾の花　同
苦學貢ギに下女と來る　同
籠の小鳥に餌が余る　同
山又山を汽車が行く　同
お茶子になれと呵かる母　同
つかゐぬ牛が飼葉喰ふ　盗み損ン
怪我までしてるのが濟い　同
愉快せぬ間にちよいと來い　同
濟い秤りに寂る店　同

○ゐノ部

留主の間に　早ふまセ合ふ言號　同
あれも是れもとする子持　同
火燵に醉ふて居る繼子　同
盈石いろふ菴の猿　同
嫁は身二ツ見て囉ふ　同

菴りには茶が湧キながら　留主かいな
又繼母のとなり聲　同
春の子に愛する箕賣　同
ベル鳴らしても出ませんが　同
魚がしの市賑わしい　類がより
柚が家で合ふ鹿の客　同
白水迦とる鬼退治　同
博士を慕ふ審査室　同
指が物言ふ魚市場　同
歌は倭の敎しへ草　累代榮へ
國簇に障わる風がない　同
右近左近は國の花　同
菊は日本の祝ひ花　同
施こす家は德が增す　同
奈良からつゞく御用達　同
慈善家は世に衰へぬ　同
長者鑑の座が上がる　同

同　記念の松に鶴が住む
同　村の字ナとなる苗字
留主でもまい　嫁に符帳は教しへどく
同　花守の貸す歌の席
同　賊が來たかて無一物
同　虫の附く樣な媽でない
同　菴は栗り戸明け放ナし
留主遣ひ　今ふも生キもの寫す畵師
同　雪隱で立てぬ膝ザ擦る
同　朝寢を伯父に言はぬ嫁
同　萆盆には立つ煙り
同　恪氣が青樓の電話切る
同　無心ト書いた顏去ナす
類いたらけ　商標注目する本家
同　百花に盡クす畵の具皿
同　盜まれた葉の菊が咲く
同　跡荷の安い祭り鯛

同　廊の火鉢は客噂サ
流勞して　別家の犬に吼られる
同　脊中の子迄謠知る
同　葵下坂竹の杖
同　まり箱に買ふはかり米
同　とふど娘も喰て仕舞ふ
るりの光り　村雨ぬけて來た烏
同　夜網ひく手に不思議がる
同　山科の荷が自慢する
同　朝〳〵垣に眼が覺める
るんな奴ッ　脊虫追跡する刑事
同　骨牌の入つた財布持つ
同　山菓子取りに羽織着る
同　兄からふるた聞き合せ
同　贋紙幣持て日暮から
類いを集　郵便局は國盡クし
同　青物捌ク天滿市

同　因果泣キ合ふ木賃宿
同　百福捌く口入屋
類イがない　一反着川に織つただけ
同　御簾に光る菊の紋
同　天津日嗣の世は榮こふ
同　名も手枕の松響る
同　鯱響める天主閣
同　本山の傘見る道者
同　朝日産み出す女夫岩

○をノ部

をゝ嬉し　互ひにくづすひざと膝ザ
同　最ふ辻占に用はない
同　妾の流産氣に祝ふ
同　ゆめなら覺めな握る手々
同　今度の子には乳が余る
同　頓がて寢るにも川の文字

惜しからぬ　義の爲捨る命なら
同　學資に賣つた謠本
同　小僧たのむと花くれる
同　かゝつた損ンはかけたより
同　主しの爲なら拔く指輪
同　生命保險の損ン笑ふ
をそい〳〵　近所が若世笑ふてる
同　欠び百程まつ御輿
同　枕に朝日恐れ多い
同　余所の孫見てけなりがる
同　深山は夏に咲ク櫻
恐レ多い　持つて來てまで脊拂
同　御慰問に泣く傷病兵
同　御用麩足でふまさゝぬ
同　日は田の上も差別無い
同　竹刀放ナすと兩手つく
追イ拂ひ　親を凉しう蚊はよせぬ

同　　牼蚊蠣にする貧くらし
同　　橋の下まで乞食狩り
同　　葱汁すゝる流行り風邪
をとなしい　　人手に育てられた態
同　　朝から入れたなりの呑
同　　泣く子は余所の子でござる
同　　媒人が娘保證する
同　　後家が追ふても追へる牛
同　　乳母の氣質が子にみえる
同　　喧嘩に關係意地などを
をい〳〵と　　算ふる友の指ビが減る
同　　宗教は榮へ國は富む
同　　燈籠にうつる庭の寂ビ
同　　十條通りも出來る京
同　　如意に焚ク火が字にミえる
同　　英語くらいで足らぬ學
同　　碁盤目くづす京の町

恩が有る　　産ミの親より孤兒院
同　　靈前近ふ涙ぐむ
同　　三ツで覺への有るほくろ
同　　孤兒院の費も足す博士
同　　食客麁末にせぬ茶器屋
同　　里の貧しい醫者の妻
をだてられ　　帳場覗かぬ嫁入前
同　　あらゆる譯を連に說く
同　　畦道戻る縫子連
同　　首尾した跡の鬢直す
同　　風呂わ囉らわずそつと去ぬ
同　　裾除けぬらす川渡り
同　　荷のたら遣ろと倜が來る
思ひ通り　　學資の禮に官帽脫ぐ
同　　百枠くらす水ちから
同　　最ふ米も賣る種も賣る
同　　足る世讓つて雅に遊ぶ

同　金子喰た媽に酒繼がす
同　政事うごかす知惠が湧く
同　重モき枕のあがる縁ン
奥が有り　問へば答へる物言はず
同　谷川へ出る散り紅葉
同　山家ながらも店が利く
同　杉皮の荷と來る這出
同　雪晴れ譽める千松島

○わ ノ 部

忘られぬ　始じめ何ンした人の事
同　世帶の思案呵かる醫者
同　眼に幻シは月の須磨
同　戻つてもまだ花のゆめ
同　大入道が爰で出た
割ては言わぬ　縁の邪魔とて兩隣り
同　恩人の爲罪ミ冠る

同　せつない戀が床に附く
同　秘密のこもる借り電話
同　つらい孝する養子嫁
同　譯けは軍事に有る離縁
同　そこはむつくり乳母が問ふ
同　下女が寢所替へて寢る
わざ〳〵と　献立買に出る山家
同　降ると所知て鶏聞く
同　自然薯持つて菴り問ふ
同　越後地の方へ行く樓主
同　大和の灸は轉けぬ杖
同　孝の家問ふ慈善主
同　畫師が嶮岨の瀧探る
譯けはいろ〳〵伯母の子にする藁の上
同　身震ひの出る持參金
同　伯爵の門ド覗く孤兒
同　せんど泣かしておしい嫁

同　不孝と孝の娼妓部家
同　言わぬが花を子に持たす
同　石屋の媽に似た小僧
われも〳〵　甘茶囉らいが押合ひぬ
同　時間ン切レ急く施行囉らひ
同　一ト樹の花が人寄せる
同　門跡様に畦走しる
同　福をくれいとうしろから
忘レ人さがし　塗り板に宇の殖へる驛キ
同　髭を眼當の花瓢
同　正直の車夫屆ケ出す
同　杖達者がるわたし守
同　日傘釣らくる瀧の茶店
忘レてもどり　開札口でサア仕舞た
同　聞た說教置た御堂
同　萩が簪シ取つた儘
同　ぼん屋が珠數を笑ふてる

和合して　川切レとめる蛇籠編む
同　月を鏡に梅が笑む
同　海陸ともに國の花
同　近所も譽る義理の中
同　交らぬ腹らに屑もない
同　嫁は賢ふ差圖乞ふ
同　犬が笑ろてるそれ見たか
わからんながら囉ろふた多の嬉し下女
同　付キ合ひ笑らひする聾
同　素人質屋が高絞る
同　月見ぬ養生してる嫁
同　棧敷で芝居見る異人
同　鸚鵡は籠にまだ馴れぬ
我大君の　御衣の唐柩迎ふ寺
同　御式中雨の障り見ぬ
同　千載一遇祝ふ民
同　御眞影拜賀する佳節

忘られてならぬ過去帳の日附臺所へ
同　是非入る眼がねどこへやら
同　嫁はこま〳〵留主日記
同　丁稚は口上道〳〵も
同　後備が佳節御影祭る
同　亡キ父かなし演習毎ト

○かノ部

考へて　雷りの畵は畵師の權ン
同　子分醉わさぬ中直り
同　道楽りする蕨取り
同　石につまづく碁の戻り
同　蜜柑も双子喰はぬ嫁
同　氣だて囉らへとさとす父
同　川上ミの相撲まけて置く
變りたもふな　切つた小指は最ふ繼げぬ
同　戰中で結ぶ義兄弟
同　成効待チ合ふ清い戀
同　上局にたつ昇級沙汰
限りなく　下た見てくらしや事が足る
同　聖壽萬歳御寶祚
同　碁器の蓋する鷄の聲
同　夕月見ても花の山
同　居喰いの金子は貸さぬ伯父
同　恩謝して田の水落す
かたい〳〵　最ふやうかんが御切腹ク
同　家の掟が絹着せぬ
同　貸人の多い金子借らぬ
同　苦學が令孃もて余す
同　貝くいちぎる顏の涙
同　起證反古にせぬ二人り
同　後家の手本に成た後家
かついでもどり豐年の籾肩に利く
同　棟梁の庭でヤアトコセ

同　萬歳宿で餅あける
同　木戸でほどいた豆太皷
同　叔に出る汗苦にならぬ
同　媽よ火を焚け暖ミ有る
同　迷信の功ウ恐ろしい
可愛がり　ちよつと出るにもつれる孫
同　繼母の誠ト子が慕ふ
同　嚴びしい奉公さき探す
同　連子の花が修羅の種
同　媽が鞍取る戻り牛
同　つらい塩ふミわざとさす
同　孫に靜まる家の涙
感心〳〵　小學生とミえぬ筆
同　廓果に似ぬ朝禮キ
同　滿點揃ふ試驗濟ミ
同　牛飼ふてゝも奇麗好キ
同　智は小兒とは思はれぬ

同　一チ聞て十チ知る小僧
同　兄親の荷が行きとゞく
貸してもらい　萆の火から連になる
同　文具店出す學校前
同　春の職手間餅に搗く
同　媽が酒屋に不足言ふ
同　念に問ふとく牛の癖せ
同　資本家も呼ぶ開業式
同　妹が市松引キづらす
媽に鼠　貯めて有る臍ソかじる聟
同　鐵之助する旅役者
同　足袋の洗濯さす能師
同　派出所へ遣る差シ向かひ
同　大黑ごりが保護さす
同　午歳が縁吉兆がる
同　質屋が詫びる一張裏
同　かんじん要メ　かゝり湯長ふする姜

同　眼こ入れたら最ふ佛
同　此人込ミも花一ト樹
同　御世のしまりをする扇
同　蝶日に透かす鰒料理

○よノ部

四ツ五ツ　琴程の橋雅ナあやめ
同　どちらが勝か柿の種
同　妾は若ふやつしてる
同　蕗の臺も出す若菜籠
同　物眞似もする廓按摩
同　靴屋が客へ六文ン出す
同　跡トへ年とる樣ナ後家
萬ヅ安々　損ンの手も打年の暮
同　米の座に神直り召す
同　無理も祟らぬ運盛り
同　米國が皆出來もよい

同　君の御威光に高枕
嫁連て　有馬の湯治乞ふ望ミ
同　招魂祭へ行ク舅ト
同　古市の割安ふ付く
同　親族廻り嬉れし母
同　姑トへ兩手突に來る
同　覗ふて囉た門廻る
同　献茶の切符二枚出す
夜るも晝も　實業の外に眼は散らぬ
同　顏見せとふど見てもどる
同　世帶盛りは樂してぬ
同　何ンぼ降るとも知れぬ雪
同　御幸豫定の道普譜
同　まだ妾宅か珍ヅらしい
慾　繼母が娘洗らい込む
同　醫者も家令も被告人
同　是程の畵も世に賣れぬ

同　皺ワ婆々眼當て行ク養子
同　銀行の古反高ふ買ふ
同　金子が付イたら子を囉ふ
同　妾の指輪は伊達でない
夜は長い
同　新兵の困る火藥番
同　長の介抱に出る眠り
同　つらい枕を知る苦界
同　敵キ打チまでよめた本
同　明ケの鐘待つ乳々囉らひ
同　まあ〳〵そないせくな嫗
慾がふかい
同　米でない米買ふ米屋
同　美人縁遠ふ親がする
同　儲けは濱へ皆もとす
同　利を見た米を敷キ飛す
同　泣く眼の光かる筐ミ分ケ
同　血で血を洗ふ筐ミ分ケ
慾がない
同　交じわる人がうつくしい

同　高鼾洩る乞食小家
同　齡イ補のふ鍬遣こふ
同　婆々とはうまの合ぬ祖父
同　据へ膳ながら辭退する
同　飴荷へ釣りの置キ忘れ
よろこばし
同　甘茶道〳〵子が溢す
同　無い傳言もしてる花車
同　はかり込ミ笑む施行主
同　小姑に貸す綿帽子
同　とてもの介抱仕遂げてる
同　呵かりつけてる付け落し
同　身請は嘘じやおまへんか
横に成り
同　梯子のうへで肝モ見せる
同　泉水覗く手長杉
同　天竺中がみんな泣く
夜があけて
同　日の出限りの田水番
合乘り遠慮する妾

同　鵜匠が寢酒買に遣る
同　犬も御得意廻つてる
同　猪シの暖ゝの有る木の葉
同　名山譽る汽車の窓

○たノ部

たて板に水　檢事の意中和らげる
同　何處迄往ても白地
同　小僧は利劍呑んでから
同　問答は小僧の樣ふにない
同　表屋具が取る絹の染ゝ
澤山ンそうに　いかに丁稚が減らぬかて
同　母が死んだら思ひ知れ
同　這出が墓を呵かられる
同　恩は返へせぬ水遣かひ
同　死んだら紙の橋渡たれ
たてた〳〵　最ふ鉾町は車止め

同　四國で躄り結構がる
同　滿願の行ウ消へる瀧
同　連判の義務是非も無い
同　藍の香の散る初幟り
たまさかに　嫁の朝寢へ草履はく
同　實母尋ねて溜め涙だ
同　更た戸母が明けに出る
同　里へ來てまで夫マ譽る
同　脫ぎ捨疊んでる寡
同　化粧の付かぬ在娘
同　捨扇でもない妾
たいへん〳〵　今朝見りや軒にたをれ鹿
同　血糊りに辷る長廊下
同　交和談判破裂した
同　非常口明けて飛んで出る
同　ゆな壷二ツ買殖やす
同　車屋は居ず傘は無し

同　殼ラ釜焚た嫣の顔
同　牛疫が村襲ふてる
高い〳〵　龍ツの天井に買ふた米
同　歩行キ習ひに無理な下駄
同　里數調らべると九里八丁
同　船で作つた初茄子
同　大家に眼だつ避雷針
同　入日にちんこ大手ふる
同　我が家の敷居で有りながら
尋ねて見よか　旦那じやそうな下女の腹
同　參りたいたら言ふてたゼ
同　そう言へば有る幼ナ顔
同　どちらが本家みすや針
同　額ひのほくろ我子らし
立チとまり　思わずくるゝ花の山
同　嫣が見とめる二人ン乘り
同　酒屋の軒に馬つなぐ

同　娘持つ身が嫁荷見る
同　道切る蛇に錫杖ふる
同　縫子詠める媒人好キ
同　看板見てりや無い時計
大事にして　儲ける時の氣で遣こふ
同　破れ暖簾に繼ギあてる
同　島田の出來に蚊が這入る
同　居り候が居にくがる
同　待たるゝ腹ラへ來た男子
大事に知られ　孝々な子へ氣術ない
同　全盛樓主に冥加ない
同　繃帶の儘母に逢ふ
同　乳母一代は御賄ひ
同　鰹飯くふ婆々の膝ザ
同　奥樣の死後嫌な下女
同　南洋から着クした猛獸
たのしミじや　鰤子ちよつと酒くつと

同　朝顔に肥へ遺る隱居
同　左りの草履減らす嫁
同　小道具殖す宿這入
同　才智有る孝を持つた親
同　摺鉢に咲ク稻の花
同　机の花は氣の吉野
ためになり　葬禮込みの嬉し乳母
同　仕着せに過たちゝぶ縞
同　年よりふけた支配人
同　まだ十德に鍵が添ふ
同　德讓り合ふ道話會
同　囉ろふ暖簾に添ふ令孃

○れ之部

禮言ふて　送り人へ貸す雪の杖
同　兄親恩に着る荷數
同　てもしをらしい雛の客
同　ころつとの傘詫びしてる
同　鰻屋で杖忘れてる
同　里で產ました嫁見舞ふ
同　悠々と去ぬ太イ賊ク
れき〳〵じや　拜領したとの庭も有る
同　湯女がよい間へ案內する
同　茶器だけ賣るとたつ仕法
同　自動車で嫁送り込む
同　御忍びじやかて警護する
同　避暑の旅館警護する
同　御前會議に並ぶ髭
例になり　梅は今年のうち送る
同　煤掃キに來る餅に來る
同　曲ク突キたのむ出入方
同　神の御田は植揃ふ
同　注連繩すれに來た鞍ゞ
禮儀　聲かけてから車ぬく

同　迎ひと握手する歸朝
同　襖の引手袖あてる
同　双方帽脱ぐ行き違ひ
同　兩袖をぼふ入城式
同　火熨斗持たせて教せる酌
同　鳩の御咄しする校長
列ツを揃へ　紫宸殿まで蛇のをとろ
同　かい札口へ順がつく
同　まだかたげてぬ濡れ纏イ
同　子供の遊ぶ戰爭事
同　敵キを欺むく藁人形
同　令孃の眼だつ運動會
同　軍籤正だしき觀兵式
例はくづさぬ　伯父が持て來る追灘麥
同　別家中へ遣る味噌の豆
同　サアベル花車が預かりぬ
同　地の催促もする祭り

同　新穀祀る中の卯に
同　顔見せ派手な京の劇
同　整理中ながら夷子講
同　金子親酔わす夷子講
同　雜煮祝ふと鷄が啼く
同　御輿の迎ひ七度半
同　收入の樂な兩御堂
禮はいらぬ　丸ふ納まりやそれでよい
同　成効したらそれでよい
同　金子で命を買ふた橋
同　留主事露顯眼で知らす
禮　別家の揃ふ月頭
同　譽めたら孫が二度來よる
同　座を引潮の千鳥足
同　迷子都合よふ渡す車夫
同　退院の笑ミ見る院長
レコ次第　講參りても別間取る

同　臍ソから下は花でない
同　博多りう〳〵いわしてる
同　花魁に虱ミうつしてる
同　夜具は幾ク手も有る宿屋
同　賣らぬでもない金屏風
同　舶來品のシャツ響る
例にして　籾種下ろしや祝ふ村
同　若狭の水が來て寒い
同　爐開キかねて歌仙卷く
同　新餅搗て祭りする

○そ之部

そこ〳〵に　笑ろて仕舞へた取拂
同　鼻聲を出しやつく融通
同　畵の書樣も時と場所
同　夜るの養生もさとす醫者
同　子の成長だけのびた極ワ

そまつにすな　盈れ菩薩に下女呵かる
同　一粒萬倍イ盈れ米
同　春の新聞子にさとす
同　よし箸じやかて伊勢土産
同　百姓の所作見せたがる
雜巾持チ　色附ケ普請ばやく下女
同　お茶挽たらし廊の朝
同　座敷育チの狆ン呵かる
同　別家の氣にも入る妾
同　いろふ電燈危險がる
同　雨そめかれて居る寡
蕎麥がよい　信州訛りの有る夜泣キ
同　鯡の相手うどんより
同　更科譽る歌行脚
傍バがよい　小間使とは表向キ
同　針差シに借る職場の燈
同　殉死の銅像極まる御陵

高座聽聞嬉し老　同
慾は浮雲し栗拾らひ　同
空向て　一人目藥さいて居る　同
一羽の鶴は餌につかん　同
居かぬ花を見とれてる　同
すこしの明かり見る盲　同
格ク別辛らい唐からし　同
佛あきれて奈良戻る　同
落して立つた慈悲の鍵　同
そしらぬ顔　言ひたい事はゑで言ふ　同
文身の有る雪の肌　同
持參ハ鼻へ出さぬ嫁　同
仲居の粹は只でない　同
翌日賣る山へ茸植へる　同
弱味噌が灸に強い事　同
這ふた番頭が飯盛らす　同
嫣は恰氣の封ウ綴る　同

曲輪引いたら客でない　同
待たした情夫に脊中向ける　同
御沓召さるゝ花日和　園
宇治の財産土に有る　同
垣嚴めしい獻上菊　同
御代の榮へを花に見る　同
戀の奴が爰々かしこ　同
茶に見る益はよい家督　同
名高い茶店取り拂ひ　同
酒屋の稽古する併優　同
一盃イのむと出るをはこ　それ〳〵それ
霧が晴れるとみえた不二　同
喋り過ると酒が散る　同
實ツ業が笑ふ濱辺り　同
巡査が御座るべゝ着んと　同
怪我人出さぬ店卸シ　そこ〳〵しや
世話の仕答へ笑む銀主　同

同　遺るも囉ふもよさそうな
同　後期へくり越す利益見る
同　不景氣しらぬ帳仕舞
同　財産も卑下さゝぬ里
そわ〳〵と　よい首尾母に蹴爪マ突く
同　櫻だけ見る姉で無い
同　意見は尻に抜け露次
同　針の縫目も笑ふ下女
同　漕ぎつける迄胸に涙
同　嬉し逢狀に化粧急く

○つ之部

月　文箱頂く妾の母
同　もふ勞れ鵜に籌消す
同　我が俤げに疲る蟹
同　愛宕詣りにのこる姉
同　酒買に行く鵜匠の妻

月　にむら雲　適の御越しに身がつぎな
同　理想の緣の荷が戻る
同　爰が畫筆の染め處ろ
同　操にかかる横戀慕
同　虫の附てる落籍嫁
同　家庭の涙は小姑
同　妬みしりぞく奥勤め
同　熊の畫惜しむ盈れ墨
同　善は急げと世のたとへ
つゝしみて　身のをこないに花咲かす
同　嫁は宿屋で針借らぬ
同　亂酒にをろす神の錠
同　百藥の長程に醉ふ
同　白紙くはへて神鏡研ぐ
同　御所へ手を突く橋の上
同　今日は一チ日秋葉札
同　禁酒に丸ふなる家庭

連がない　京へ油斷ンの牛祭り
同　隱居は困る雪日毎ト
同　遊んでくれぬ味噌屋の子
同　出嫌いが猶出憎クなる
同　馴れた夜綱も止める妻
同　居轉後弱ふなつた圍碁
同　帶にして置く伊勢參り
月が出て　岐阜提灯は消へた樣な
同　戸口の白を椅子とする
同　舊曆の日を指びでくる
同　湖南へ汽舟臨時出す
同　尾花の凄い二人り連
釣りに行く　櫻たけ見る嵯峨でない
同　蕗火の異見まだきかぬ
同　鯖にわかした虫も買ふ
同　瘧りの間日にまだこりぬ
同　男忍ばす切籠影

同　しゝの針で覘ふ猫
同　黄のむ間も沙魚に無い
同　家主へ組んで鯛祝ふ
つり合ぬ　提灯の方が容顔わるし
同　親のゆるした緣ンでない
同　當世着てゝも在言葉
同　親の薪を荷に添へる
同　番頭が辭退してる孃
つまみ出し　飯熒が猫呵かつてる
同　くさ木の虫の勢イ見せる
同　雪隱から箸呼んで居る
同　茶は幾ク手にも撰分ける
同　蒲團の中の針呵かる
同　賽錢黄だらけ投る
同　鼻を氣にする嫁入前
同　親に似ぬ子になれよ鼻
つよい〳〵　分量して呑む蝮酒

同　轉けても泣かぬ男の子
同　筍着ても川内縞
同　土俵に人がはへた樣な
同　是見ても知れ日本紙
同　幕内轉かす貧乏神
つらいなあ　まだ妾の有る賀振舞
同　出られぬ首尾を待たれてる
同　ほんのかゝ樣有つたなら
同　言へぬ孝する養子嫁
同　男は鍋へ這入られず
同　切羽の金子に時が追ふ
つもつた〳〵　手の皺痛む初イ奉公
同　癪の押し人が癪の種
同　菴から知らす臨時釜
同　成効する迄幾ク苦勞
同　博士で禮に來た乳々屋
罪も消へ　施主は鵜匠の放生會

同　茅の輪潜つ笑てふ花車
同　眼をふさいだら蓮のうへ
同　ひら下手になつた尼
同　櫛は不用にした妾
同　鐘撞た後は客へ出ぬ
同　最ふ一ト打スを産んだ嫁
月は秋　雅人の多い須磨の宿
同　野宿忘れて友こゝろ
同　運の峠をさとす伯父
同　風雅の團欒照らしてる
同　嵯峨野の昔偲ぶ笛
つら〳〵と　新紙よむ妾なまいきな
同　短文ながら行き屆く
同　讀んでる經の譯知らぬ

○れ之部

願ふてもない　連子世取りにしてもろふ

同　是で二度合ふ御大禮
同　見合イせいでもあの子なら
同　百萬石の蘇生雨
同　いつしよに參いろよい御連
同　長壽の德養老盃
同　百老に附いて式拜がむ
覗らい通り　親の眼がねが戀の的ト
同　夢の浮橋した扇
同　敷島安ふ打つ兵士
同　親も樂さす濱の金子
同　衿遣つた夜は這ふて來る
同　左りはらみに笑む妾
同　抵當流れとなつた後家
熱心　事業成効見る郡長
同　姉は病氣の種作る
同　親の案じる學机
同　信用から出る身の光り

同　寢て居る牛を見る石工
同　學位得た後は研究室
同　月下雪窓に煉る苦學
同　日光見とれる彫刻師
願ひが叶い　此嬉しさを知らしたい
同　新婚旅行出雲汽車
同　子は軍籍に輝きぬ
同　亥の猪禮にあげる關
同　今は首尾した情も笑ふ
同　市松さびしう最ふ抱かぬ
同　忍ぶ苦のない旅行する
寢ても起ても　身の置處のない大暑
同　置いて戻つた子に痩せる
同　旅商人が親思ふ
同　夫マの美男が肥へさゝぬ
同　安い相場が頭痛うたす
寢られん〳〵　子は突きつけて來たものゝ

同　狼近ふ聞く紙帳
同　一聲聞かなない土産
同　宵の栗りをよみ返す
同　葉を喰ふ音がせわしなる
同　酒は呑んでも西瓜番
同　水嵩サ増さる堤守り
同　此梅にして此月夜
子　蚤が苦になる夫マの留主
年忌が廻り　腹らに居た子も燒香さす
同　俱に見た花今筐み
同　末寺が檀家連て來る
同　金佛壇と替へた後家
同　佛檀に足す貯蓄金
同　捌き人のない不和も解く
同　白い帛紗に蓮畵書く
根が出來て　南洋へ國の芽がほこる
同　今の世までも祖師の杖

同　一葉からよい菊になる
同　富士丸呑みにした霞
同　壜ンの慈姑がせり上がる
同　土手の柳が蛇籠抱く
同　外科醫に見せる鼻の下
同　遺産分けから情が薄い
猫二疋　鯰とり合ふ凄い爪め
同　薄茶の小言聞く脊虫
同　情夫にお手かしあまへてる
同　鯰いけどる腕で競らべ
同　婆々の夜伽にさも哀れ
同　離れは婆々の蠶棚
直が出來て　夜の明けるまでをれの嫣
同　車闘引く枯れ柳
同　醫者へ哀れな猿が行
同　白粉嗅い寢卷着る
同　かなしい孝行する娘

同　洋妾と名の替わる貧
猫に小判　金瓶祝ふ宿這入
同　助炭に張た應擧の畵
同　下女に見せたら只の石
同　盲らの多い座敷市
同　青樓の掛もの面白い

○な之部

生嗅い　和尙の髯を舐る猫
同　石蘚取りが谷登る
同　跡腹ら病める肴籠
同　梵妻が抱く肥へた猫
同　旦家氣薄うした和尙
ながらるゝて　鶴の宿にもなれ小松
同　敬老會にも先づ上座
同　宮中に杖ゆるされる
同　萬年曆胸に有る

同　遊ぶ木精は松の下
同　世の變遷を語る老
中にも一人り　勤め忘れる客が有る
同　同じ花魁が勝れてる
同　自動電話が聞へてる
同　三枚肩で舁ぐ井筒
同　鳥無き廊へ仕替への妓
同　眼をつけられる安宅關
長き緣にしを　松に結びし鶴のゆめ
同　羨まれてぞ橋わたる
同　神に願ひの糸祭る
同　袖分かつ氣も知事に有る
同　松に似やかる蔦からみ
啼く鶯の　梅にも飽てい桔槔
同　廊下感ンじる國大工
同　飼ふて有る樣な菴の庭
同　灯に有る加減とは不知

同　戰局中止さす碁盤
流れてる　技師連て行砂金川
同　筏の損ンも有る出水
同　在の小溝はこゝろよい
同　鑛毒歎く麓在
同　端書の戻る水見舞
同　うつかり吸へぬ夏のたま
何事も　因縁づくと泣かぬ父
同　其日のげんは朝に有る
同　大母家任せにしてる後家
同　遠慮仕合ふてよい家庭
同　貴さまは產れ日が悪い
同　番頭へもたれかゝる後家
同　棟隔だてたら最ふ佛
同　有志簿戻す不作年
長の月日　貧乏神が見放なさぬ
同　一ト幕で見る連鎖劇

同　看護の嫁も骨と皮ワ
同　何ン石喰ても飽かぬ米
同　勤める事とする孝女
同　博士で禮に來る乳々屋
中に一つ　世界にるいのない國旗
同　國旗の樣ふな辨當飯
同　源氏ほり出す西瓜市
同　母の耳借る里歸り
同　長者の萬燈より明かい
同　闇の手潛ぐる運の鬱
同　客へ秘肉な眼玉汁
泣き笑い　戰死の譽れ聞く遺族
同　悲劇の跡に見る喜劇
同　子だからつらい貧の母
同　胸の透き知る灸の跡
同　子ゆへめでたい元の鞘
同　同じ盥に有る吉凶

なさけない　墨塗り馬車も黑による
同　名乘れぬ孫に菓子持たす
同　風に吸われた田の甘味
同　取消し仕ても緣の邪魔
同　私生子抱て戻りやがる

○ら之部

樂觀して　投票の豫想笑む候補
同　今賣らぬ米高ふ積む
同　聯合軍へ加擔する
同　ゆめの長秘す三日間
同　投票用紙は恥じぬ嵩さ
落第して　次郎と同じ敎場室
同　靑樓でモルヒネ呑む放蕩
同　字引を母にせがんでる
同　苦學の友へ恥かしい
同　屎ソ擔桶荷ふ農學士

同　白粉損ンになる妾
ちちがあき　順禮も一ト日鵜飼見る
同　去り荷の通る戻り橋
同　とふど妹も余所の籍
同　晝は禁酒の煤拂ひ
同　地藏堂拜む南瓜賣
同　金ナ縛り解く不動產
同　勳功調査も仕て仕舞ふ
同　蒸籠の湯で臼洗ふ
同　食客譽め〳〵櫃洗ふ
來年まで　祝ふた餅の臼直す
同　手まりの熨斗は取るでない
同　むつくり媒人斷わりぬ
同　案山子暫らく非職さす
同　三日逢ふたら逢へぬ雛
同　方位に延す地鎭祭
樂は苦　出てた時とは痩る妾

同　醫師の出入の多い別莊
同　姑トは孫のない小言
同　休めば凍る水車
同　榮曜嬉しうない妾
同　盆の夕暮見る石女
同　私たしは產まぬ罪が有る
樂人じや　子數から來る貢き代呂
同　保釋が乞食けなりがる
同　零落しても釜が鳴る
同　師走を余所に梅探り
同　慰みの印ン我れが彫る
同　苦の世の婆婆に菩を知らぬ
同　温泉あたりもせず夏不知
樂〳〵と　風雅の道に流れてる
同　脊中ふくれる下り坂
同　辭職した後は庭に鶴
同　田は鶴に貸す冬籠

同　最ふ花散た木槿見る
同　せまい巷りも氣に廣い
羅生門から　雲井を覗ふ不埒もの
同　素では通さぬ柊賣り
同　自轉車で來る銀モール
同　貰屋店に出た腕ナ
同　高塀繼イでる道具方
同　今は芽を出す艸の角
落涙　簞笥が殼らになつた留主
同　一人り子死なしてる驚風
同　夜拔けしられた大かい貸
同　子は湧きものと言ふものゝ
同　夫マに言ひ置く虫藥
亂法な　太皷で病氣はやされる
同　自轉車で婆々轉かし行
同　とり口違ふ意地相撲
蘭詠め　冷へたビールも呑む日曜

同　今日は休ます綿のばし
同　大かい金目の棚惜しむ
同　見忘れぬ狆ンひざに置く

○む　之部

むけた〳〵
同　吸殻と飯煉て張る
同　龍安寺にもまけぬ味じ
同　藪入が跡ト見返へらす
同　疊に町かる箒馬
同　最ふ這出にはこりた肩
同　魔の屯知る杉の皮
同　板場へ栗を通してる
無理言ふな　介抱する身も病みそふな
同　旗持雛と祭れるか
同　婆々様が守りこりやしやる
同　親は着いでも着せて有る
同　大將人形は再來月

同　在は手織で結構じや
昔しを思ひ　宵寢してやる母の粹
同　嫁のこゝろで嫁遣こふ
同　涙で若葉ぬらす須磨
同　智の交換も還附論
同　楫尾に有る茶の履歴
同　耳塚で泣く留學生
同　顏に火熨斗のほしい後家
同　電車一區を始末する
娘に惚れ　道にない道ふむ煩惱
同　店くち萱買たがる
同　田を耕に來る苅に來る
同　内は貧でも緣が降る
同　乳母に呑ました鼻藥
同　針の師匠に聞き合はす
同　賴まれもせむ夜臼挽く
同　晝中食が泊り込む

同　紺ン足袋響る炭問屋
同　一枚買ふた大津の畵
昔も今も　献立替へぬ神の前
同　壽の稀れ人が橋わたる
同　力士ばかりは髪が有る
同　菊の御威光めでたがる
同　汲めども盡ぬ雅の流れ
同　邪魔な柱がよい家相
同　主しの居る池枯れぬ水
同　裸百貫相撲取
虫の音聞々　負け公事歎げく村の寂び
同　夜襲案じのない露營
同　貴賤隔だてが宿にない
同　寢余る夜るも有る花魁
同　御忍び客もある艸家
同　歌のしをりにする宿直
同　夢なつかしう見る這出

無茶　酒と言ふ魔に狂ふてる
同　太皷破ぶれる程叩く
同　賊ク居けだけ仕とく尼
同　我が打つよふに碁の助言
同　元も粉もないねぎり樣ふ
同　貸蒲團屋が質受ける
同　母に肩たくませがんでる
むこ向いて　耳へ這入らぬ緣咄し
同　待たした情夫にすねて見る
同　嚔め包む湯手拭
同　金子が出來たら又御越し
同　丸髷の裏見て囉ろふ
同　長の介抱が水の泡
同　案山子の弓が田に利かぬ
無心言ひ　伯母へ狀書く奴質
同　切らす氣の有る妾の母
同　俳優の計かる惚れ加減

同　娘の年期巻き直す

○う之部

嬉しい〳〵　初孫畚に馴染まさぬ
同　物に味じ有る齒の達者
同　田はよふ出來る水も有る
同　知らぬ土地でも鬼はない
同　産んだ三人ン皆達者
同　縁に付く髮見る鏡み
同　馴れぬ官服疊む母
うけがよい　ちらしに乘らぬ味じ喰はす
同　下モの禍ひ産まぬ長
同　師の代藝から出世する
同　冬至は腹に有る大工
同　鼈甲屋の嫣氣がもめる
同　金子持ながら氣が低い
同　姉の身持が縁の紐

同　野菜の余る在敎師
浮世　子が有つて泣く無ふて泣く
同　惚れてほし方は惚れよらん
同　注文二タ手有る餅屋
同　不肩に水の流れ説く
同　櫻は人のさとし艸
同　絹着てた身が假り蒲團
同　本家が帛紗借つて泣く
産れ子じや　初暦見る六十一
同　仕法立から夜も寢よい
同　最ふ稼ぐだけ我が身附き
同　檢視が野壷無慘がる
同　何處の鬼めか可愛そに
同　若ふ老行く賀の祝
うつくしい　一山修羅にした小性
同　子無しの家はいつ見ても
同　畵師が手本にする娘

同　しびり呪のふ塵りもない
同　菫もさすが紫野
同　花咲かしてる後家じやげな
同　伯父が藪入見違へる
同　極彩色に眼がくらむ
同　花より人の見る床几
牛　農家は寶庭に有る
同　神事に自慢引て來る
同　養子を探がしてる娘
同　北野で見本とる石工
同　壽に有りそうな夕渡し
同　風邪引かぬよふ角ノを卷く
同　鰻の刎る土用日和
運がよい　新家疊んで富貴繼ぐ
同　嫣が堂島拜がんでる
同　無難ンに付た檸柑舟
同　友は藻屑の船ナ都合

同　難ン舟の圖をあげる畫馬
同　軍旗は腹に卷いて無事
同　翦矢の立つた脊負柴
同　憎くまれる程乘る定期
賣たるものは　夫マにわたして留主日記
同　親でも自由ならぬ廊
同　事始めから春らしい
同　彌陀や羅漢の骨董店
同　書畫骨董から仕た整理
同　孤兒に品數問ふ院長
同　百萬石も一ト勝負
麗かな　浪除け石にとまる蝶
同　舟に男の針仕事
同　浪すれ〳〵に鶴が行
同　伸びた樣に見る江の柳
同　何處から付いた船の蝶

○の之部

延びちゞみ　腹ふくらした提灯屋
同　角は自由な蝸牛
同　氣の置き處に有る命
同　七十五日で元の護謨
同　細工ながらも凄い蛇
野も山も　革盤に入れて去ぬ登記
同　我れの世にして百千鳥
同　歌の古蹟の多い嵯峨
同　をしなべて積む銀世界
同　ブックに入れて去ぬ寫生
登りつ下りつ　我れ一代を子に咄なす
同　朝夕凧の多い春
同　いつしか竹の蝸牛
同　暑の加減知る寒暖計
同　濱師が山の夢はかる

同　打襠の龍まばゆがる
同　雅は爰に有る菴の道
呑み込まし　智慧の貸人席に附く
同　最ふ跡ト掛けの世話がない
同　二人りに慈悲な追人出す
同　鵜に生活の助けさす
同　橋から丁稚西向ける
同　花車からかける眼の電話
長閑〳〵　町チではこんな春はない
同　牛の鼻にも附く五形
同　箸屋の障子明いて有る
同　帆柱のぼる猫も有る
同　艸の餅賣る渡し小家
覗イてる　先達の持つ玉襷き
同　女湯の穴下がり眼が
同　まだ置き馴れぬ質使ひ
同　遠慮仕勝な乳々囉らひ

同　乳母は寢顔に暇マ乞ふ
同　惜しい櫻が谷に有る
同　ひよ子が親の羽がいから
同　月も見頃と梅の窓
野中に立　夜は人の居ぬ葭簀茶店
同　軍人も來る馬の市
同　散歩ではないモデル孃
同　理科に凝る子が麥見てる
同　哀れ催す敗將の碑
同　石が敎しへる道しるべ
軒下に　飛脚の用が舞ふて居る
同　片輪はづして寢る車
同　下駄の齒が喰た雪のこす
同　鷄と一家のかけ行燈
同　日和廣げる藍莚
同　子の雪拂ふ乳々囉らひ
同　誰が捨てたやら愛盛り

長閑〳〵　老は苧桶と門むしろ
同　矢橋の舟も片手漕ぎ
同　船嫌らいさへ愉快がる
同　今ふは聞こゆる島の鐘
同　玄海灘も靑疊
同　すや〳〵寢てる乳母車
熨斗つけて　西瓜に出來た裏表
同　菴の戸に有る炭俵
同　くれる命をもて余ます
熨斗のつけたい孝子と聞た西瓜番
同　よいのが出來て古い嫗
同　命不知の多い子分
同　憎くい姦婦も子が不憫
同　嫂に貸す常小袖
同　苦學が令孃もてあます
同　看病の孝へ貸した金子
のこり多い　遺言一人りすゝ違ふ

同　鶯あとにする出舟
同　足らぬ孝足す花手桶

○お之部

大鯛小鯛　明石と若狭競爭する
同　婚禮二夕處ある料理
同　海神祭る浦行事
同　形たのすン言ふ種菓子屋
同　客に自由な波止生淵
をゝ嬉し　夫マの氣に入る初幟り
同　逢ふた辻占鼠泣き
同　好きに氣のせく段はしご
同　旦那の去んだ跡へ情夫
同　髪亂そふか潰そふが
送り屆け　施こし洩れもない施行
同　囉ろて囉ろたら余所の人
同　嫁は氣長ふ杖に添ふ

同　迷子の母と俱に泣く
同　月だけ乘せて戻る船
同　奉職先で式擧る
同　入營の着替へ持返へる
同　命助けてまだ惠ぐむ
をやじを欺し　子も置去りにしとく不義
同　花車の旅費迄持つ參宮
同　魔屈つへ通ふ墮落生
同　落しところの違ふ金子
同　逢ふ樂しみが藥うけ
同　花車に預ける謠本
同　人魚喰はして居る孝子
凡そ百　朱家具の並ちぶ大廣間
同　病氣全快祈る闔
同　富士八方から畫にしてる
同　顔見せだけは大一座
同　雀に成つて出る踊り

同　跡ほど小そう書くお福
同　忘れた年をめでたがる
をひたゞしい　女護の島になる歐州
同　普門ン品ンから功が蟹
同　魔風かと見る渡り鳥
同　其人に有る功勞金
同　幼稚園ほど居る露次
同　そつとして居る拾らひ紙幣
同　蛇のをとろえる御苑内
同　二楷から出る越の雪

○く之部

ぐるつと廻り　瀬田の橋行金子飛脚
同　元の都でやはり止む
同　夏痩を知る帶の丈
同　山で飛行機見て居たら
同　船が通ると元の橋

同　やれ〳〵犬にならなんだ
同　蕨の樣に書たのし
同　見臺出して兩手突く
喰ついて　蚤が娘の帶解かす
同　接木嬉しう繩ほどく
同　凧の尾を取る鬼瓦
同　龍の小凄い肉ク襦袢
同　聖天の像いやらしい
同　暇マ下さるか質出すか
同　蠣の在所は岩に有る
同　來年履けぬ沓らしい
同　高い洋服直切らさぬ
國の爲　義務が盡くせる今としから
同　招魂の寄附後家もする
同　世の教育になる殉死
同　御前會議に椅子進む
同　看護婦志願する妹ト

同　馬の上から母さとす
同　子だからけなりがる石女
同　命犧牲の決死隊
苦勞して　背中の子まで謠知る
同　專賣品にした發明
同　とふど養子が左り供
同　花車にも更けて見られてる
同　人遣こふにも味じがある
同　後家が總領の卒業待つ
くる〳〵と　燈籠仕上げて風響る
同　好な逢狀に化粧急く
同　休んだ事のない地球
同　金子踊らして足見てる
同　土產の車春に舞ふ
同　音頭が廻す踊りの輪
ぐわんぜなし　高歩貸にも菓子せがむ
同　國の敗報笑ふ俘虜

同　三ツ子に還へる赤襦袢
同　憎くいながらも愛らしい
同　位牌持つ子が笑ふてる
同　身替りを打つ手が下りぬ
くすぼつて　寡の土瓶强よふなる
同　國栖家の竹は出世する
同　榾仕わけてる杣の嫣
同　嫣が這入と湯が濁る
同　伏家いぶせき夕蚊遣り
同　風呂焚呵かる狸婆々
同　近所が笑ふ節季前
關白どの　北の御臺と二合のむ
同　青樓の家業を氣樂がる
同　山の神にはよわつてる
同　矢剱のゆめを淀め膝ざ
同　嫣怒らすと尻抱かす
雲の如し　白たへの景は書けぬ富士

同　花のうつりも實によし野
同　丁稚が蒲團負わされる
同　不出來の花火笑ろふ龍
同　床板の歪面白い
苦界
同　頭痛する夜も厚ツ化粧
同　蒲團の中で涙かぶる
同　蓮スの花にはつかしい
同　母の多さへうたがわれ
同　不孝の守りを孝がする
同　泣いて嬉しい時も有る
苦にならぬ
同　助言したかて碁が違ふ
同　寒い妻子も知らぬ酒
同　好きなら手鍋世帶でも
同　嬉し逢ふ瀬の道の雪

○や之部

燒餅燒き　傘の借り所問ふ女房

同　言ひ譯けを聞く耳はない
同　一軒違ごふ聞き合せ
同　新婚譏してる寡め
同　言ひ分ンのない下女去ナす
同　鹽湯の辛らい朝戻り
同　繼いで見せてる破ぶれ多
同　仕似せ附けてる渡し小家
やれ〳〵まあ　屋形舟出た相撲取
同　輕るいと聞たさとの母
同　馴染の水で足洗ふ
同　今年も延た店ナ卸し
同　不容顏の籍も出した親
同　家明こふした身の油
同　寢た間を母が針運ぶ
同　母の笑み見る引祝
山程高い　直段は安い檸柑店
同　汽車へ積み込む輸出米

同　御恩をはかる尺がない
同　其腫物も最ふ峠
同　傘の用意は入らぬ虹
同　眼の邪魔になる鼻の瘤
同　物を拾ふて居る脊虫
同　風の持て來た丘の雪
同　學味研究する書物
山路を分けて　炭燒研究する學生
同　鑛山事業町造る
同　師の隱れ家を問ひあぐむ
同　天文臺の位置探す
同　繩一ト筋で直が違ふ
同　犬の跡ト追ふ銃獵家
山の中　猿は無稅で酒釀す
同　大師の德を知る伽藍
同　南朝の古蹟見る行脚
同　西洋建見る避暑村

同　開化の見ゆる廂し髮
同　有志電燈も有る稻荷
やかましい　年相應に遣こてやれ
同　又侗が遣る南部坂
同　晝寢がぼやく庭の松
同　四ツ竹の錢早ふやれ
同　關係の薄い日本でも
同　口はちよつとも年寄らぬ
同　土俵出たたら割つたたら
同　井戸端た會議する長家
やつばりそふか　肺病かなしい言号
同　醉ふほど粹になる後妻
同　字引見てから笑ひ合ふ
同　食客出したら離緣乞ふ
同　噂の有つた子が似てる
同　宿替へしたら產んだ後家
同　寵愛の下女亂舍す

同　一人りさとつて鶴に折る
やさしいなあ　内の言葉も女形
同　男の出來ぬ介抱する
同　恪氣あそばすのも御歌
同　泣いてくれるは禿だけ
同　名は鬼ケ嶽相撲取
藪入して　久しぶりかく牛の咽ド
同　母と嬉しう見る芝居
同　媒人に下た見しられてる
同　父が艪を押す船で去ぬ
同　近所に行儀響められる
やすい事　八百屋の荷にも鯛が有る
同　鮒屋見たをす夕みぞれ
同　木の芽下枝折て遣る
同　藁直で注連を買ふ三十日
同　南瓜棒抜き買ふ長家
山越へて　母負ふ孝も聞く說教

同　母の無事知る遠砧
山と海　弟とは漁師兄は杣
同　肥料と薪木に富だ村
同　蕨あしろふてる煮附け
同　鳥の巣に貝交つてる
山と湖み　滋賀縣はよい公園地
同　遠路苦にせぬ踊り好
同　切れ凧とふで果てしない

○ま之部

まて〳〵まて　よい嫣をれが世話をする
同　今比牛に無提灯
同　月給が下りや拂て遣る
同　ならぬ堪忍伯父がさす
同　家來どもとは舊ウ芝居
同　其談判はをれが行く
同　凧に飛出す梅の主

間違へて　おしゆんの聲が外トにする
同　壷屋が御客追いかける
同　素良で耳塚問ふ道者
同　幸福を着る染屋の子
同　萩の字荻と無理もない
同　牛後一時とある活字
同　近道の方が遅れてる
同　姉へ渡した文使ひ
同　瓢簞棚に瓜がなる
丸ふて四角　文久錢の穴笑ふ
同　饅頭に敷た竹の皮
同　蚊蠣の中から月見てる
同　使客の名も僧ながら
同　高歩影から貸す和尚
同　金貨の代用した紙幣
同　演習する間は敵き味方
同　地球の中は論ンが湧く

待てくれ　連に遅れる足袋の紐
同　今ン夜一ト晩ン寢て思案
同　合算がけた置き直す
同　節季の鬼に秋語たる
同　最ふ跡舟のない渡し
同　鰒の賛成は思案もの
同　たやすく極まる縁ンで無い
同　そりやよい連じや參ろかい
同　滿期の末は吃度添ふ
松　此世萬種の木の司サ
同　齢には似ぬ若緑り
同　記念に植る播磨苗
同　書人を譽る金屏風
同　干蛸の宿に猿が借る
同　いつに變らぬ老の友
同　朔日あての花屋の荷
同　割木になると直が安い

同　石油に見たら派利きもの
まくられて　下着も曠れな宮參り
同　川の上越す散り紅葉
同　譯けある腕ナはづかしい
同　藝を打つ迄もない相人
同　堤みの風を厭ふ姉
先づ〳〵先づ　中直り後は元の友
同　上客の手をとる袴
同　今日の上座は太神宮
同　貴僧で逢ふた家出の子
同　椅子置直す校長席
眞直ぐに　御主大事と年ン明ける
同　ゆかまぬ御代の飾り竹
同　子にも操を見習らわす
同　柳も垂れる春日和
同　氷柱の下がる冬の瀧
まさかの時　釣り舟も有る濱長者

同　非番巡査が竹刀持つ
同　土藏の前に蓮植へる
同　溜め池も有る合併村
同　丁稚の氣てん金盥
眞白ろけ　是が降ろとて宵の冷
同　名は青谷と言ふ盛り
同　西瓜屋が顏赤ふした
同　寫眞に薄い雪の鶴

○け之部

けんのん〳〵　毒婦の膝に夢みてる
同　干水に堤み突き直す
同　蜩聞て峠越す
同　君子の遊ぶ場所でない
同　せなんだ怪我も呵つとく
同　子供呵つて銃仕舞ふ
同　乳母はふらこゝ低ふ釣る

同　食客僕よりよい男
同　元の場へ置く石地藏
同　鼻木入れとけまとふても
同　水泳がさぬ連は下戸
同　蔓禁ンじる伽藍堂
検査して　不正調らべる枡秤り
同　娘へ惜しい智讓る
同　角の無い鹿やらい出す
同　鑵詰め許す夏戰爭
同　軍醫が譽る甲種兵
同　よい水筋に營所置く
同　肉クに燒判押して遣る
今朝見たら　千代なら一勺讀む釣瓶
同　織た莚の松葉拔く
同　愛相の盡た女郎の顏
同　幽靈は竿の干し忘れ
同　昨日の筆と多をい垣

けつこふ〳〵　産んだ子が皆賀に揃ふ
同　米壽の杖にたかる孫
同　日和も余る秋仕舞
同　壽にも不足のない長者
同　作らぬ米を喰て余る
同　咄しのみ聞く飢饉年
同　何處の湊も米の富士
同　嫁の襦袢が乳でぬれる
景色譽め　まだ乘り足らぬ渡し舟
同　松に天女がたわむれる
同　鰣網も見る新舞子
同　根上がり松を時の椅子
同　地價問ふて居る遊び客
同　釣りは御留主の京の客
同　出舟が苫の雪拂ふ
同　日記にとめる京の蛸
權利が有り　本妻腹らが持つ位牌

同　姉に抱かれて居る戸主
同　判事が華族呼び捨てる
同　分家で家代憎くまれる
同　肩た脱ぎ手帳に附けて去ぬ
同　乳母が遺書出す家督論ン
毛が障り　夜網が櫛をぞつとする
同　油の染んだ枕紙
同　八髯困まるとろゝ汁
同　炬燵の中の猫呵かる
同　首尾の炬燵に情がうつる
けしからん　附馬が土藏よんで去ぬ
同　廢兵僞る藥賣り
同　女教師辭職さす校長
同　新聞で媽叩き出す
同　御家柄知る刀研ぎ
同　出ぬ乳いらいに來る食客
同　媒人が婆々の悋氣聞く

實にゆたか　馬より牛が草臥れる
同　軍人からも出る詩人
同　腮干して居る執達吏
同　世の苦は知らぬ山長者
同　觀兵式に鶴が舞ふ
同　庭の不二見て春祝ふ
同　離宮洩れ聞く樂太鼓
同　血をふんだ馬花をふむ

○ふ之部

ふき送る　無心の籠る狀ぶくろ
同　何處定めんうつろ舟
同　西洋に居ても出世風
同　鳩の巣かゝる澪標
同　波止場の聲が船に利く
古いけれと　國寶の二王手入れせぬ
同　めでたい法事來て囉ふ

同　近松ものに有る趣味
同　孝子の薄着暖ふさす
同　飽きも飽かれもせぬ夫婦
同　先づ御座附は梅の春
同　おあげ申さぬ借りでない
同　錦とも見て着る筐み
同　錦はゆかし母の雛
同　囉た暖簾に繼ぎ當てる
殖へた〳〵　筏の保護に簑で出る
同　今青島も我が領土
同　最ふ島國でない日本
同　飛び入の有る參宮講
同　奥の雪解は谷に知る
同　笑顔で見てる貯金簿
ふみつけて　蛙ではない茄子らし
同　英語通じる女學生
同　紙子樂しうする手製

同　子は鋸りのちから足す
同　男名前で首尾知らす
ふみかぶり　望んだ縁が不仕せ
同　よい男には最ふ惚れぬ
同　獵師の落た猪々をとし
同　出來た利喰いも賣らで損ン
同　傾城の二字知つた貧
同　神ならぬ猪々落し穴
同　土産の花が谷へ散る
同　三途の川も一人り旅
同　奥樣の有る御方とは
伏し拜み　施藥囉ふて出る玄關
同　恩賜にむせぶ傷病兵
同　俘虜が日本感謝する
同　二見泊りがこゝろよい
同　二人りが囉ふ慈悲礫テ
同　雪を眼當てとした臨終

同　桃山で泣く舊ウ官女
同　再勤ンの後は梅喰はぬ
同　金子まで囉ふ橋の上
同　命の親に資木借る
同　病む手にぬれる施米札
殖へて來た　蚊蠅の質受責める媽
同　始末の稼ぎをもしろい
同　一戰ン毎トに守備場が
同　堤みへ運ぶ古疊
同　一ト浪毎トに沈む岩
同　宵は踊りの手が延びぬ
同　雪が解けると太る瀧
同　最ふ川骨の見えぬ岸
普請して　最ふ實業に乘り變わる
同　親の代とは格ク別な
同　看板だけは古い儘
同　長命の親よろこばす

同　我庭に牛通してぬ
不仕合せ　七荷したのは質の種
同　後見の伯父思ひ出す
同　里で操をたて通す
同　守りの入る樣な孃の守り
同　（題文）　媒人をこな世話惡しふ
同　子は有りながら里へ去ぬ
同　一生奉公で終る姉
同　義理にせまつた直り智
同　其道悟す抱へ主
同　遺骨を迎ふ里の母
舟に乘り　浮御堂持て去ぬ寫生
同　實にも愉快な螢狩り
同　京の子になる近江米
同　向かひの田から戻る牛
同　米かしに出る蜜の妻
同　ペストの飛脚する鼠

同　御輿爭そふ申祭
同　凉み客呼ぶ花火賣り
同　見盡した花又譽る
同　扇射ませとさしまねく
あだより　出世仕過ぎが母に泣く
同　卒業待ち遠い言號
同　三年だけは淋しう寢る
同　萬里隔だてた春も知る
同　叶わぬ戀も假名任せ
同　一つ枕をぬらす嫁
同　寫眞にものが言はしたい

○こ之部

小半日　昆布卷き思ふ樣に焚く
同　砥石研究する大工
同　嫁の愛相につい長居
同　針に釣られて居よる侗

同　萬歲イ御氣に入る別莊
同　鶴に見とれて暮ルる畫師
小流れ　沈めたなりの洗らい鍋
同　鮠の集る春の雨
同　折りの舟さへ蹴爪マ突く
同　右と左りに萩が咲く
同　鍋炭の付く蓼の花
同　爰々またげたち柚の裏
同　軒下に米搗かしとく
同　茶席の用に足る寛
同　水馬しさへ小そう舞ふ
同　帆前舟とも見る笹葉
同　鶴の餌水に足る御庭
乞食も　泪だの雨の降る燒け田
同　惜しさは同じ散り櫻
同　義捐金出す喰い余り
同　御通過拜がむ線路際

同　買ふて戻つた祝ひ餅
同　酒の香のする三ケ日
肥へました　預りし子が返しよい
同　靨寫眞にして送る
同　後妻の實つが子にめだつ
同　樂な御内と宿へ多
同　麥蒔き濟むと樂な牛
小袖着て　亡き母思ふ土用干
同　靈祭る日も有る後妻
同　まだ其上の樂好む
同　朝から琴に寄るくらし
同　卯の花買ひが京に有る
ごく内証　怖い逢瀬をふむ妾
同　宿帳だけが今日の妻
同　内からさいて出ぬ指び輪
同　下戸寒からす夕紅葉
同　さし米そつと賣る船頭

同　青梅を出す琴の箱
同　お妾カの寫眞見せてやろ
同　荷から文出す小間物屋
こらへ〳〵　夜々にお部家の燈がくらい
同　堪忍の緒を切る刄ば
同　娘持つ身は氣が低くい
同　艾の消へるまで焔魔
同　後家が支配の戀慕泣く
同　悋氣は胸に秘す賢婦
同　船から出した白い尻り
こりました　骨牌畫書た畫馬上げる
同　門が最ふ男斷り
同　釣竿焚た火にあたる
同　警察でする二日酔い
同　來たかつた京去にとなる
同　只が高コ附く但馬鰒
同　寢所から笛呼んで居る

同　たとい寡めで暮らすとも
腰打て　百日照りの見ゆる瀧
同　めつきり孫が重もなつた
越しかた思ひ　禿と雪の憂き咄し
同　一代人に逆らはぬ
同　我れの履歴を綴る菴
同　鹿の皮着る菩提心
同　里で泣く日の多い不肩
同　我れに指びさす小姑

○え之部

海老　神器納めてをろす錠
同　作り身譽る伊勢の宿
同　鎧脱がして衣着る
同　毛布屋らしい作りもの
同　色香もたせる茶椀蒸し
同　魚問屋から出た家体

同　鮒の中に生きてよる
同　正月は炭かじつてる
同　薄い蒲團で寢る繼子
ゑらいやつ　團扇何んぼん破ぶりよる
同　關を土俵へ投げたとは
同　今のは近ふ落ちたらし
同　派手に損んする膽が有る
同　儲ける時はぬかつてぬ
同　親の讓らぬ田も殖す
同　よい文字囉て居る鰉
同　家体の跡で踊つてる
同　親無しの子が優等生
同　とふと金主と聟舅ト
同　吐いた廣言反古にせぬ
縁を待　おた福賣りに出もならず
同　葉櫻に氣の附た母
同　今としは媒人來て囉ふ

同　丁稚入用の札も釣る
同　嘘の仕込みもする易者
遠方から　注文狀の付く老舗
同　汽車積みで來る嫁入荷
同　假名で讀む名の客も來る
同　鯛はいき〳〵氷詰め
同　聖德慕ひ來る御陵
同　近こふ親しむ月と梅
同　魚積む汽車に水が垂る
同　東洋の空へ來る飛火
同　緣は不思議な處に有る
ゑらい〳〵　牛もさぞかし我れも土用
同　汽車の進行も止まる雪
同　晝寢の枕持ち歩行
同　なる程坂が泣き不動
同　一ト年寄ると茶はもめぬ
同　紙に仕上げる迄の汗

同　犬も舌出す雪の峰
同　幟りを産んで建てられる
同　産み月の腹ら田で撫る
緣じやなあ　いつしか麻につれる嫁
同　時鳥から歌の道
同　古戰場に啼く轡虫
同　花にたとへて急がるゝ
同　小言ト言ひ〳〵子が殖へる
同　ふみ板よりもきたながる
同　乘合馴染みから媒人
同　人種の違ふ嫁囉ふ
同　女房の鼻に嗅ふない
同　めで度ふ引た女教員
同　命の親と添ひ遂げる
ゑらいけど　しかし稻にはよい土用
同　聯合軍にはをゝつかぬ
同　結構さ拜イしてる靈場

同　落目氣付かふ最ふ入日
ゑん慮して　化粧の薄い内妾
同　琴はかたづけさす喪中
同　腹らに繼子の氣が退かぬ
同　柳見習ふ嫁の所作
同　金主に安い身請さす
同　施藥囉らいが風俗恥じる
同　上ワのをとらす小姑
同　荷數せがまぬ腹違ひ
永代のこり　德は粟津の碑に見える
同　田にしてあげる祠堂金
同　戸扉の和歌は世の鑑み
同　御卽位も有る舊ウ御殿
同　畑ケ田は利固退いだ家
同　佛罰ツさとす婆々の面ン
同　國の寶となる三種
驛きが殖へ　野洲と艸津の間イに寄る

益きがふへ　開拓の地も支店置く
同　配イ當て俱に上がる株

○て之部

手柄ら〳〵　扇の緒が鷹へ散る
同　今度は桃の花でない
同　歌から賤の名が開らく
同　射とめた鷺と山下りる
同　荒れ獅子捕ふ山田守り
同　跡跛譽れの印紙賣
同　本家が譽める一等賞
同　妾の腹らを借らぬ嫁
出て仕舞　くすべ人笑ふてる狸き
同　媽が初荷の跡トを掃く
同　波止場で直切る車賃ン
同　茶椀集めに行く蕎麥屋
同　あての標目すかたんじや

同　悪る醜い客が水囉ろふ
同　新聞に妾覺悟する
同　波止場かなしい言號
同　眞綿より外取れぬ繭
同　やみに成つてる螢籠
電氣　世は針金の水明かり
同　按摩もすれば燈もともる
同　瓦斯の競爭ちよこざいな
同　隱居の天窓五十燭
同　打擊をうけて居る石油
同　田にもひきたい豐の秋
同　夜拔けの跡トも照らしてる
手を入れて　懷ろ寒う朝戻り
同　指びが物言ふ看市
同　名所の松に餅つめる
同　月見の曠れと成つた松
同　孝女のほしい貧すくふ

手を叩き　醫者も見違ふ日の氷り
同　猿も一所に直を極める
同　鐵槌憎くふ投げた侗
同　乳母が甘酒嬢に賣る
同　十俵の米どこへやら
同　口あいてお見ぬけて有る
同　賣られる猿も眞似してる
天のあたへ　氣絶つの口へ這入る露
同　今死ぬ橋で金子拾ろふ
同　月の宿らぬ田は見えぬ
同　双子に呑ます乳が余る
同　落とし參らす繫ぎ舟
寺から里　赤貝買に來てござる
同　衣屋の嫁上品ンな
同　白紅イを買に來る
同　信徒頭は柿喰てる
同　後家に信心する和尚

同　尼が持て來る富貴の臺
手を入れて　鳥の糞ンさへ見ぬ御陵
同　下た枝の柿爪めの跡
同　青島に立つ日の國旗
同　炬燵に仕てる汐干狩り
同　最ふ借家には居ぬ貯金
同　妾の堪忍さす旦那

○あ之部

あぶない〳〵　二代繼ぐ子が粹過る
同　子に不愛相な刀研ぎ
同　まだ酒臭い仕方立
同　酒で衝突してる鼻
同　後家たてますと言ふものゝ
同　小刀とつて菓子持たす
朝　霜消しとやら粹な嫣
同　安い商ひ手を打たす

同　内も二見の樣に拜がむ
同　お茶挽た箸持ちにくい
同　露次の隅みに蕎麥屋の荷
同　垣に咲く花眼覺草
同　初春祝ふ下がり蜘蛛
同　大福祝ふ氣は違ふ
同　栗剝いて居る料理人
同　清い手の鳴る神の前
あつさりと　百圓無心言ふ花魁
同　水盤の芦譽る客
同　最ふ四日目を待つ雜煮
同　山料譽めて茶漬喰ふ
同　仲居の粹は只でない
同　惜しまるゝ程語つとく
同　勿体ぶらぬ村役場
青〳〵と　最ふ苗代へ來る雀
同　水氣の絶へぬ庭の苔

同　老鶯の聲包む
同　肥への利益が田にみえる
同　柳が茶店儲けさす
同　嫗の顔色煽てられ
同　春の香旨ふ喰ふ團子
同　海さへ暑う見る土用
同　變らぬ御代を示す松
同　雪の中から笑ふ麥
有るが上にも　國の寶となる子數
同　家督の土が流れ込む
同　貯金仕とくは飢饉當て
同　孝子の薪ほめて買ふ
同　金子の餓鬼堂に落る慾
同　荷を押し付ける信用先
同　投げた南瓜を嫗が買ふ
同　捨てゝよい慾捨てぬ婆々
同　着だをれの名が京に有る

同　子持ち乞食は椀受ける
朝起きて　寢耳にためた椎拾ふ
同　給仕嬉しうはづかしい
同　眼覺は天滿橋の下た
同　天地拜がまにや箸とらぬ
同　青田百反ん眼の藥り
同　茶の湧く迄に苅る馬草
同　小僧が作る雪佛
朝起て　直上げの仕たい持參嫁
同　榾火取り卷く雪休み
同　木魚が嫁に氣兼する
秋入れじや　籾運ぶ後家涙ぐむ
同　田川へかける便利橋
同　寺の門まで籾莚
同　米商人はひまらしい
同　田親へ不作泣く協議
同　花嫁も履く藁草履

あほらしい　煽てる客を撥で突く
同　圍ふた米の直が安い
同　學友にそれる幇間
同　蜆取り見る鯨突き
同　妹に養子とられてる
同　散ン髪の儘去る後妻
あり〳〵と　やみの夜縫ふて行く螢
同　紋のみえてる染め直し
同　助けた狐枕元
同　かけ繼ぎの下手ばやいてる
同　蚤の睾ン見る顯微鏡
同　兜さゝげりや守護の影
同　濁らぬ水に澄める月
同　獵やめよとのまくら神
哀れなもの　聖りの眼には有財餓鬼
同　煎ンじる米もない溪間
同　水鳥の餌になる年貢

同　親とも言へず子と言へず
同　屋根だけみえる水の中
同　藪から戻る家が無い
同　助け人のない雪惱やみ
同　探り杖して施行囉ふ

○さ　之　部

さあをいで　戻りに面ンも買ふて遣ろ
同　加減んした湯に孫を抱く
同　床几へ据へる將棊盤
同　片馬をろしむかつかす
同　乳々も張つたし手もすいた
同　高齡の母へ脊中向ける
同　裸体で取つた裸の子
坂登り　馬子が一俵すけて遣る
同　水桶荷のふ坊男
同　はる〳〵參いる比叡の山

同　最一つほしい鼻の穴
同　寝べ風邪くらい抜けそうな
同　船も器械も水放なれ
同　炭出しに行をい寝縄
同　砂ほこり乗る牛の鼻
同　跡が見合いうまくする
同　己の日参りが湖水見る
同　跡棒の重い駕のゆめ
同　下だり荷の有る山仕事
扨も涼しい
同　寝行儀のよい蚊帳の中
同　氣の向く瀧を書た畫師
同　按摩半分知らぬゆめ
同　持つて去にたい橋の風
同　月は床几の下た流れ
同　紀すを譽める土用の丑
同　夕立肴に汲みかはす
同　冬は如何と問ふ座敷

同　返辭して譽る保津舟
同　西瓜よばれし夕立晴
同　居ながら川鹿聞く菴り
さま〳〵に
同　親は支離に仕とむない
同　迷ひ子哆らして所聞く
同　一ト日曠れした嘉定錢
同　思ひのこりのない介抱
同　議論の果てぬ協議會
同　乞食が見てる寄進札
同　うれいのこづむ救助小家
同　鉛筆這はす軍事記事
同　姿雅の有る濱の松
さとられて
同　賃取られ損ん二日灸
同　宿屋の異見聞く二人り
同　似てない兄は扨てそふか
同　暇まを出された下女の腹
同　眼のふち赤こふした二人り

名さしの客へ花に出ぬ
同　蜆のうまい藤の花
さかり〳〵　奉公どころか學仕込む
同　何を着せても其うつり
同　さくらの傍へ寄れぬ宵
同　厄年屁でもない運勢
同　空飛ぶ鳥も棟越へぬ
同　横に車の無理も聞く
同　御幸待つ花祈る空
同　朝の間店へ釣瓶出す
咲かけて　其間の長い冬牡丹
同　最ふ辻びらの出る平野
同　寒さにまけぬ花の兄
咲揃ひ　梅と福壽草笑ひ合ふ
同　今ふだけ禁酒破ぶりたい
同　今日こそ春の春らしい
同　茶の花ながら景に滿る

同　縱覽の札菊に出す
同　野菊ながらも美くしい
同　茨は花に針隱くす
同　蜂蜜の巢に立つ薫り
同　常の閑靜に似ぬ櫻
同　龜井戸の池美くしい
誘ひ合い　どちらも留主になる踊り
同　藪入り同じ國訛り
同　學校へ行くも睦まじい
同　通學團も有る山家
同　嫁そしつてる說教果
酒がすき　苦戰で越へる年の坂
同　いつも格子に牛つなぐ
同　時刻が來ると咽が鳴る
同　學有りながら身が持てぬ
同　老ても顏の色がよい
同　毒殺の智惠貸す姦夫

同　薄着してもやめられぬ
同　親は雫も呑まんのに
同　不經濟なる受け出され
同　離縁狀置て嫣が去ぬ
さしつかへ　蛸とはをかし稍尙の膳
同　御預け先は花車で來ぬ
同　惜しい借家も借りかねる
同　中からしめた電話口
同　推選狀の署名辭す
同　礫の合圖投げ戻す
同　主人に願こふ人はらひ
同　代の力士が二度出てる
座敷建て　呼び鈴ン買に遣る隱居
同　大工の手間は吸ふた後家
同　建具も嫣も古びてる
同　琴程の橋かける庭
同　庭も流儀の有る好み

同　皇族方の指定宿
同　淺黃の幕に隙がいる
同　喜の字の額は老の曠れ
同　今年は祭り廣ふ呼ぶ

○き之部

きれい好き　風流な庭を小言いふ
同　貞女は鏡臺らさぬ
同　雨の降る日は猫くゝる
同　指びて疊の芥拂ふ
同　松茸山でよはる連れ
同　牛の尻にも糞つけぬ
同　借つた煙管で吸はぬ嫁
同　下駄の脫ぎ樣も一派有る
氣に入て　嫁囉てから勵み出す
同　出代りの下女惜しまれる
同　親から先に惚れた嫁

同　蛸で御仕きせ最ふ一合
同　嫁の料理の酌に醉ふ
同　世話した甲斐の有る媒人
菊を見て　一勺置いとく風雅人
同　泉下の君を偲ばるゝ
同　牧方下りの多い電車
同　めくつて印紙ふまさゝぬ
同　地球一ばい咲かしたい
きさんじに　子は町中の御手車
同　人にすかれる德が有る
同　一人產んだら泣かぬ嫁
同　草鞋の紐も解く嫁
同　体操の仕ぶり譽る乳母
同　買ほねど殖へる人形箱
同　只あい〳〵が孝に足る
同　位牌持つ子が皆泣かす
氣儘くらし　好いて好かれて世を飽ぬ

同　遠い旦那に冥伽がない
同　滋養せいでもよふ肥へる
同　客を撰り取りする自前
同　世を憂きとせぬ風雅人
きつしりと　里の土產が荷につまる
同　割り引つめて行く電車
同　世間ンへ派手にない簞笥
同　半櫃重ふ去ぬる下女
同　おた福の荷は輕るふない
同　花に込み合ふ渡し舟
同　實に官山ははへ茂る
昨ふ今ふ　充分笑ふ花盛り
同　もしと言ふさへはづかしい
同　都は花に飽がない
同　嫁になるなり後家になる
同　まだ茶汲みよりせぬ丁稚
菊　杖突く花と思はれぬ

同　日毎トに衣裳派手になる
同　實に下たに置く花でない
同　會に出す宵イちから水
同　上ワ畵師が筆淸む幕
同　萬代不朽の薫り草
きたない顏
同　ぬれ手拭を乳母が持つ
同　嫁譽て去ぬ炭問屋
同　妹トの可愛がる市松
同　頰ふべたの飴拭いて遣れ
同　櫓兵衞の舞もこつて有る
同　水涕泪だ鍬ワが寄る
同　鍋炭だらけいじけ猫
同　記者も探ぐろの木賃宿
同　中々變ン相知れぬ車夫
木が太り　注連繩の丈けのばす禰宜
同　先祖の植へた山拜がむ
同　位置を直した石燈籠

同　年々益きを見る槍皮
同　尊さの增す神路山
同　風致整ふ長等山
同　昔し變らぬ滋賀の里

○ゆ之部

湯がぬるい　玉露の味じにもつてこい
同　炭手前からする茶室
同　今の間に孫入れてやろ
同　是では葛がかたまらぬ
同　京都へ往てはへイラレね
油斷大敵　碁はあなどれぬ寺男
同　機械係りの眼は凄い
同　口に平和と言ふけれど
同　飼ひ犬に手を嚙まれるぞ
同　水番が野に篝り焚く
同　宵に川越す入梅の旅

ゆめ見し心地　藁火が主しへ禮のべる
同　身受後二人り稼ぎ合ふ
同　儲けうたごふ程の運
同　日本語嬉しい助け舟
同　看護婦馴染み有る傷兵
同　漁師の家に居る二人り
同　母も傳染してほしい
同　濱の旦那に衣裳減へす
同　凱旋の夫マ拜がむ驛
雪が降　呑み連れ誰れぞ來んかいな
同　馬琴相手に寢正月
同　銃聲の響く雲が畑
同　座敷に羽子の音がする
同　舊主の仇と知る節句
同　鴨の曠たつ寒見舞
同　拔け道止めになつた藪
同　主しとちん〳〵鴨の鍋

同　時々春も跡ト戻り
同　起きて又寢る柚の家
ゆる〳〵と　橋立も見る温泉の戻り
同　母も爪めさす春の琴
同　草鞋に拂ふ通行稅
同　ゆめ乘せて去ぬ乳母車
同　鐘に櫻も暮るゝやら
夕間ぐれ　下りる雲雀とのぼる月
同　茶摘ばかりの一ト渡し
同　共同の水道大つかへ
同　畦から畚へ乳が急く
同　薄着の無心母が泣く
同　電燈の故障困まる下女
同　取り次電話斷はらす
同　鷺かと見たる御秡幣
同　まだ草の根に居る螢
ゆつくりと　褶に春まつ雪所

同　尻落つかぬ一區乘り
同　里の祭りに宵宮から
同　雛買に來て京泊り
同　將棊の强い媽の留主
同　居祭りの聞く雨の音
同　雨には猿と寢る木賃
同　けふは和服で花見てる
同　里で見て來る盆踊り
夕邊から　嫁は氣せはし綴れさせ
同　市松は抱た儘寢てる
同　是が降ろとてきつい冷
同　戻れぬ理由媽が問ふ
同　適に逢ふ情夫うつゝ責め
愉快〳〵　身請金子出す濱戻り
同　勝利の咄し聞た父
同　ヒイキの關に團扇さす
同　引ずり重ふ竿と去ぬ

ゆられてる　竹の下にも積る雪
同　涼しう月見る蜑の蚊帳
同　釣り舂の子はすや〳〵と
同　金盥呼ぶ船の客
同　どふやら灘へ來たらしい
同　最ふ橋げたについた水
同　敵と舂で行き違ふ

○め之部

眼にもの見せ　貧しう育つた子の出世
同　慢ン心こらす師の竹刀
同　死骸と成つて戻る嫁
同　松葉ふすべる寺男
同　後の生蕃いましめる
同　流連させる今朝の雪
同　小姑らの口針で縫ふ
同　軍醫が惜しむ不合格

眼が直り　壷坂下りる二人り連
同　鰻わたの禮に夜る來てる
同　八ツ目鰻もあなどれぬ
同　結納の來たこがれ先
同　撿定も受けて來た秤り
同　杖の櫻に花が咲く
同　忘れてならぬ普門品
同　丁稚がこりて去ぬ縫屋
めつきりと　節ツが變はると山も笑む
同　程よい啞も言ふ禿
同　回向する子も畵像に似る
同　秋たつ夜から月は澄む
同　京奉公から品ンがつく
同　薄毛もはへて氣もませて
眼をまはし　一發ツで敵キ越後獅々
同　喰い逃げ客に禮も言ふ
同　店は信用が遊ばさぬ

同　煙管の先で人遣こふ
同　春の子蝶が守りしてる
同　施行嬉しう草臥れる
飯の種　脊中大事がる猿まわし
同　酢でいためてる越後獅々
同　遊ばぬ鍬に錆がない
同　情け賣てる墮落果
同　妾は上手に機嫌とる
同　編笠を着て軒流がす
同　監獄里にさらす賊ク
同　杣が鋸り大事がる
同　足し繼ぎにせぬ道具箱
眼にとまり　骨董屋の店行キ越せぬ
同　赤髭骨董高ふ買ふ
同　小男あきれてる風呂屋
同　廓果てに似ぬ朝禪キ
同　牛の晝寢をさゝぬ蠅

同　粋な名刺を拾らわれる
同　贈位の御沙汰有りがたい
同　介抱が教せる歸り花
同　深山のさくら惜しむ杣
同　足の運ばぬ畫師の旅
めでたい〳〵　花賣らぬ身にしてもろた
同　子の成長を入れりや延び
同　世に愛でらるゝ壽の譽れ
同　老行く春も氣は若い
同　禪僧は髑髏竹の先キ
同　乞食も祝ふ富士のゆめ
面冠り　最一度慈悲にすがりつく
同　箱の蓋取りや遠ふ舞
同　能師が賊を追ちらす
同　敷居越すだけが人らしい
同　伯父と來て居る家の虫
名所じやなあ　一ト樹の松が幾昔し

同　時雨粧ふ松一里
同　雲に奥有る千松島
同　松のふりから名も舞子
同　霧しまに池もへそふな
同　瀧は皷みの亂ン拍子

○みノ部

未練のこし　朝の迎ひが憎らしい
同　遺言一人りづゝ違こふ
同　夫マに言ひ置く虫藥り
同　少々いたゞく神酒の跡ト
同　舟へ投げ込む金扇
御代泰平　軍刀にもない血の曇り
同　號外に出す事がない
同　我が身〳〵の業勵む
同　武官の遊ぶ國の風
同　高祿クの身は冥伽ない

水貰らひ　外ト井戸響る小鮒賣
同　地價と小作は安いけど
同　井戸は家から方がわるい
同　宇治で起した發電所
同　川下村も照り凌く
同　咳に糸瓜の効能知る
同　又焚かしてる氣儘風呂
同　粉藥を呑む養生室
同　我に戻つた醉ひ潰れ
みとむない　親父旗持チ媽大將
同　着替へてお行きたらどうへ
同　破ぶれ障子は紙が泣く
同　おかるの黑い在芝居
同　内證孕みを乳母の郷と
同　女三人鶏足
同　外ト足を直す女形
同　すこしは用のほしい妾

見附ケ出し　字探がしの畵を孃が笑む
同　そこも爰もとしめじ谷
同　矢間の笛に義士が寄る
同　たまは樓主の手に戻る
同　山からたぐる運の蔓
同　扨わと媽が豆名刺
同　谷流れ笑む鑛學士
同　家宅搜査が有ウ力クな
同　敵敎へてる馬の糞
水あけて　つぼみも開らく手活花
同　輕る荷でもどる豆腐賣
同　鯉の目方を輕るあたる
同　根燒の効能菊に有る
同　湯屋が器械で瀧仕組む
未開〳〵　まだ鶯は啼に來ぬ
同　外人とまる宿がない
同　野原で遠い次キの驛

同　漁村に乏し貯蓄心
神酒上げて　地祭りしてる大普請
同　船にも祭る神の棚
同　花車はげんまつ陰陽石
同　三種の神器尊がる
同　亥の日精進妻もする

○し之部

知つての通り　下戸は内證で櫃もろふ
同　縁に卑下する改革後
同　酒なら眞似の御酌乞ふ
同　我の恥シ言ふ明キ盲ラ
同　歸參後膳の猪口上げぬ
同　不幸つゞきでネへあなた
集合して　磯石取り卷く漂流船
同　禁獵の社頭に遊ぶ鳥
同　世の浪知らぬ友衛

同　佛敵挫しく薤旗
同　翁の末を時雨てる
しやくりあげ　稽古のつんだ手管泣く
同　倆ながらにも口惜しい
同　さすが祇園は神輿まで
同　のこつた女郎は妙な顏
同　犬文字屋の衣裳着る
靜かな事　櫻の咲て有る高雄
同　花のよし野も冬木立
同　勅語朗讀する校長
同　日曜の學校蟬が啼く
同　芒の姿畵の如し
同　伊勢は陽氣の神ながら
同　前荒れのして銀世界
同　剛た看護婦結構がる
同　門トの往來も今朝の春
同　立居もさすが畵師の妻

同　味噌汁の澄む給仕盆
辛氣くさ　添乳何ンべん針放なす
同　好キ合ふてても影の花
同　髪結ふ氣にもならぬ妾
同　敎しへた理屈吃つてる
同　來る人は來ず雪は降る
同　妹が邪魔になる火燵
同　嫌らいな客に貸した膝
同　とふ造つても低い鼻
同　墨摺つてゝも此簞笥
呵りつけ　心はそふでない泪だ
同　よろこばしてる付け落し
同　是悲讓る子に樂見せぬ
同　元の主人へ誤らす
同　見處出來た弟子の筆
同　狆が足音聞き違ふ
同　店一ばいの番頭の眼

同　水車屋が守り送る
同　忘れた口上覺へさす
思案して　仕合せの緣辭退する
同　尼にする日が母にない
同　學より外は氣が疎い
同　自殺ツ遲れる子の寢顏
同　情死無効にした二人り
同　債主に我が身任す後家
同　詫て去ぬ氣になつた嫁
同　雪隱から出りや碁が變る
皺がより　紙子に疊む鶴の首
同　船の道だけ附く長閑
同　澁柿軒で甘ふなる
同　梅が枝下ろす干シ蕪
同　火熨斗の荒らい朝戻り
同　仙臺平ラも醉イ潰れ
同　長壽の相となる額ひ

同　苦勞を拜がむ親の像
辛苦して　發明品に名も賣れる
同　獨逸追討出し軍士
同　博士の母に有る美談
同　埋めたての地に稻の涙
同　返歌がとふと慕潛る
同　儲けの金子は遣かわれぬ
敷島の道　貴賤平等の教しへ草
同　武士の氣も和らげる
同　御數萬首の御先帝
同　猛キ皇國に有る優美
同　むつくり喰わす肱鐵砲
同　母の名も出る女禮式
同　神も感ンじて雨降らす

○ひ之部

日暮になり　石山へ着く遊參舟

同　西窓へよる學の根ン
同　易者も買わぬ古羽織
同　毛針と變へる小鮎釣り
同　鳥眼の親へ急く大工
火の用心　稻木土產と添□御札
同　聲を自慢に金棒引く
同　鞴祭りもする鍛冶屋
同　ぬるい茶を呑む風見舞
同　本山近ふ水噴かす
同　跡仕舞見て去ぬ棟梁
同　京の平井にすゝめられ
同　銀杏で幾ク度のこる寺
同　仕舞見廻る焙爐部家
ひんのよい　金屏の畵が加茂祭り
同　殿樣さすとわけがない
同　强盜の樣にみぬ法廷
同　奥は香合せ歌合せ

同　見合の茶店も見とれる
日が暮て　長良の花は鵜の篝り
同　探海燈に歩哨が附く
同　子を脊負ふての一桝買ひ
同　苦學の机車夫が退く
同　畫ルの樣にする花簪
同　文明のちから結構がる
日の出　拾らい扇を氣に祝ふ
同　年々殖す小作帳
同　帆に陽炎が立のぼる
同　二見の岩公西瓜賣る
同　本家に並らふ所得稅
同　年々殖やす施行高
同　堂島戻る上等汽車
同　囉ろた養子も商法好キ
同　まさゆめ買ふて見る濱師
同　大根ンに紅塗る板場

久々じゃ　木綿蒲團で寢る花魁
同　どちら風かと花車が問ふ
同　若ふ譽め合ふ十年ぶり
同　洋行戻りの歡迎會
同　碁の客愛相してる嫁
日を重ね　竹の筍から曝着買ふ
同　馴染む安堵に乳が張る
同　適々の京何處も彼も
同　女房氣とりに成た湯女
同　富士百景にしてもどる
同　安い家賃となる老舗
低い鼻　天狗ばつても句が秡けん
低い花　娘の異名谷ざくら
低い鼻　かせる物なら貸す見合
同　男子産んでる青樓の嫁
同　高襟眼鏡かけられぬ
同　顏中になる涙だ川

同　不二子とは名もあつかまし
ひや〳〵と　華表潜ると汗がひく
同　衿に秋知る雁の聲
同　母が汗かく扇の手
同　樂しみだけは妾でない
同　忍ぶ盗人も生は善
同　子の相案じる刀鍛冶
同　暖くい小枕廻はす妾
久々しや　母も斂入する芝居
同　御目見への藝が客よせる
同　孫に守りうた思ひ出す
同　糸道附ける落籍嫁
同　飲む日本酒は妻の酌
同　達者は結構マア上がれ
同　御殿で長居してる乳母
日を撰らみ　めでとふ余所のものにする
同　苗代の田に種下ろす

同　土藏の地どりに注連を張る

○も之部

もじ〳〵と　娘一人りに皆酢貝
同　掛ケ斷りに出憎がる
同　繼母の跡で膳につく
同　つい打チあける折りがない
同　傍ばへ寄る程退ク娘
もまれてる　まだ髷結へぬ相撲取
同　風に打死にする案山子
同　浮世の浪に乘る世帶
同　奉公してから頭が低い
同　琴平祈る反吐の船
同　皆關取になるつもり
同　嫁の味方は聟ばかり
同　御座船哀れ檀の浦
もつともじや　母の墓前に泣く繼子

同　媒人も口がふさがらぬ
同　花見斷はる座頭の妻
同　炭屋は黑い猫囉ふ
同　飯盛りの名の顏杓子
同　後家は丸髷小そう結ふ
同　なりゆき咄し聞ク家主
儲けてる　靴直しまで演習地
同　今度の媽はまん直し
同　飛行機撮型頓ン智がる
同　軍人製造國の爲
同　安底買へた仕込み米
同　時世に連れて戰爭劇
同　兼松と言やわかる濱
囉ろて來て　こんな孝女は親の運
同　咲くまで知らぬ花の色
同　虫の呪イ書く甘茶
同　近所へ分ける小原水

同　仲居が名ざしよろこばす
同　羽織の殖へる勝相撲
同　殖へた貯金を笑む丁稚
同　猫譽る嫁知惠が有る
同　不女の花と手で育つ
もろい〳〵　身は空蟬とよむ辭世
同　壽は假りの世の假りの花
同　聲は立てとも秋の蟬
同　さくらは人のさとり草
同　二度目の霜で枝にない
もふよかろ　臼ぬらさした蒸籠方
同　水もの出して場合切る
同　後見退て器量譽る
同　小餅は若いのが旨い
同　利喰いして退く眼が高い
同　改心の後に資本出す
同　伯父がこらしめ連て來る

同　鳴子の繩は切れた儘
同　隱居へ灸ト連て去ぬ
物知らぬ　恥し一ッ寃つ身の修行
同　縞の羽織が上座する
同　をれは世間ンがふんで無い
同　數鶯にひとし我れ
同　金子の威光で出た議員

○せ　之　部

世界一　金子の降る樣ナ兩御堂
同　神よりつたふ國守る
同　實に名山じや歌種じや
同　菊の御紋の付た艦
同　天然ンの美は盡きぬ富士
同　繭の輸出年に增す
せくな〳〵　水吐かしたら醫者いらぬ
同　何樂しみに來た花見

同　まだ日は高い瓢は重い
同　不二百景わまだ半ば
同　吃に同情する判事
同　そう牛の尻り叩いたて
同　猿戸で天窓蹴爪突く
同　釣りする人の氣を習らへ
同　遠慮を醉す久しぶり
同　一人り舁ぐなら舁ケ神輿
世間ン廣い　釣鐘職もいそがしい
同　賤が伏家にくらしても
同　お多福じやとて囉らわれる
同　飛び上がつたる井の蛙
同　年ン明けて出た籠の鳥
同　萬國の地圖胸に置きや
同　汗て咲かした富の花
同　別ツに余つてない娘
同　慢氣を挫しぐ上にうへ

同　替つた事を出す新聞
脊が低い　床屋の丁稚高い下駄
同　樓主が高い下駄履す
同　もつこちゞめる手傳人
同　折角の衣裳曠立たぬ
同　弟トはのぼりつく神輿
同　砲兵の志願刎ねられる
同　相撲の名乘りも飛び鼠
同　三十二相に惜しい嫁
千に一ツ　蓮に迷ひの枝がない
同　鰒屋にも有る下毒丸
同　年嵩さに金子持たしとく
同　星かつよふな閻當り
同　湯も母が添ふ嫁入前
同　秘密の使者が變裝する
同　壹斗以上も這入る瓢は

同　よい中も垣する登記
同　悪病見舞か豫防する
成長して　見にくい鶴は無い扉風
同　虫が桑摘み追廻わす
同　囉らひ乳の先恩返へす
同　聖壽に因む手植松
同　木の葉の搔ける山となる
同　障らぬ神となる獻ン樹
同　母が貞女見習らわす
同　鷲に取られた子は智識
同　子孑の退く臼の水
同　苗代の水加減する
同　鬼瓦立つ雀の子
先生内か　此月見ては寢られまい
同　猪々のふともも持て來た
同　人舁イて來た神輿舁キ
同　産婆一人りで手に合ぬ

同　奥様が針御待チ兼ね
責任をひ　國の代表する公使
同　雜誌の記事も正誤さす
同　日本大使が海越へる
同　別家から戸はしめさゝぬ
同　命うけ合ふ外科院長
同　腐り議員の愚論解く

○す之部

涼しい〳〵　余所の夕立の囉らい風
同　寢行儀のよい蚊帳の中
同　上布の無心まぎらかす
同　模様亂だるゝ玉簾
同　その癖髪は濃いのに
すきが有る　氣合イと俱に立ツ力士
同　素顔の首尾は別ツな閨
同　梅見の亭ンははづす花車

鋤が有る　立關ながくも在の醫者
透キが有る　齒醫者が金齒すゝめてる
好キは格別　番頭呼ぶにも太郎冠者
同　牡丹餅五ツ年よらん
同　寢酒朝酒茶椀酒
同　けふも釣られに行く川原
同　親の死に目も逢わぬげな
すつとした　醫者のゆるしに櫛遣かふ
同　追出しの場が敵キ打チ
同　雷りが入梅持つて去ぬ
同　清潔檢査濟んだ跡ト
同　尻の掃除は屁で仕てる
同　鬼の面拔く大晦日
同　今年の風呂も入り仕舞
同　隧道の氣も晴れる湖み
すうて居る　萇の稅も大かいもの
同　飴ほうばつた齒拔け婆々